

『桑華蒙求』概略・出典覚書（上巻）

【緒言】

本書は備中足守藩主木下 定の編になる人物故事談の書で、日本（桑）と中国（華）の類似する故事を対置させたものである。これ迄殆ど注目されたことがなく、先行研究としては、恐らく岡山市在住の篤学の士吉田哲郎氏の仕事（注）があるくらいであろうか。本稿ではその先学の業を聊か継承し、改めて出典等についての調査を行ったものである。もとより完璧なものではないが、当時の日中間の書物をいかに利用したか、またその利用の仕方についての一端が明らかになっていると思う。今後更にこの覚書を巻ごとに（中巻）（下巻）と成稿し、本文校訂も進めて、一書として読書子に提供することをめざしたいと思う。

（注）『年代順桑華蒙求一覽——扶桑之部——』『桑華蒙求訳注』（全八冊）『新桑華蒙求物語』（全七冊）などで、すべて岡山県総合文化センターに所蔵される。吉田先生自身による手書きで丁寧に書かれたものを電子複写し製本されたもので、先生周辺の同好の方々に配られたものとのことで、郷土の偉人の業に強く心を動かされたことに始まるとのことである。猶、稿者の『「本朝世説」の基礎的研究と本文』（『同志社女子大学学術研究年報』第56号、二〇〇五年）『本朝蒙求の基礎的研究』（和泉書院、二〇〇六年）『「桑華蒙求」管見』（『同志社女子大学日本語日本文学』18号、二〇〇六年）とも関連するので併覧戴ければ幸いである。

【 키워ド 】

蒙求 人物故事 日中対照 漢学教養書

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

本 間 洋 一

【巻上】

1 諾尊探海

イザナギ・イザナミの二神は天浮橋に立ち、底に向かい天瓊矛をかきさぐって滄海をえ、更にその矛先から滴る潮が固まり礫駁盧島となった。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上）。猶、『日本紀略』（前編一・神代上）『帝王編年記』（巻一・天神）にも類似文が見える。『扶桑蒙求』（巻上・1諾尊探海）は本書に依る。

2 女媧補天

太古に四方の地が崩れ、九州が分裂し、空も地も欠け、地上の火は消えず、水が広く氾濫し、鳥獸が人を襲った。女媧氏はこの破壊を収めてもとの太平の世界に戻した。

出典は『蒙求』（449「女媧補天」。以下原則として徐注本。『淮南子』所引）。猶、この故事のことは『初学記』（巻一・天）『事文類聚』（前集卷二・天）『祖庭事苑』（卷五・懷禪師前録）『円機活法』（巻一・天）『君臣故事』（巻上・君道門・女媧補天）『金壁故事』（巻四・女媧鍊石補天）『潜確居類書』（巻一・形氣・鍊石補天）等多くの所謂類書に見えている。

3 武尊白鳥

日本武尊は東征の帰途、伊勢の能褒野で崩じ陵に葬られたが、白鳥と化して飛び去り、大和の琴弾原、河内の旧市に至ったので各々陵を造り、その三陵を白鳥の陵と呼んだ。

出典は『日本書紀』（巻七・景行天皇四〇年是歳）。猶、『日本紀略』（前篇四・景行天皇四〇年是歳）も同じ。他に『古事記』（巻中）『本朝神仙伝』（倭武命事第

一)『本朝蒙求』(巻上・2武尊草薙)等諸書に見え、『扶桑蒙求』(巻上・19武尊白鳥)は本書に依る。

4 望帝杜鵑

黄帝の子の昌意が蜀の娘を娶り帝嚳が生まれ、その子孫が蜀の王となった。蚕叢・伯淮・魚鳧をへて杜宇が望帝を称した時、鼈霊の屍が長江を溯って甦り、帝の宰相として仕えるが、帝は自分の徳の彼に及ばぬことを悟って禅譲し、鼈霊が開明帝となり、望帝は化して子規(杜鵑)となり飛去った。

出典は恐らく『円機活法』(巻二三・子規・「望帝魂」)、『太平實字記』(所引)。他に『事文類聚』(後集巻四四・杜鵑)、『華陽国志』(巻三・蜀志)、『淵鑑類函』(巻四二八・杜鵑)なども比較的近い。この故事は『蒙求』(92「鼈令王蜀」)、『群書類編故事』(巻二四・望帝化杜鵑)等の類書や和刻本『六臣注文選』(巻四・左思「蜀都賦」劉涓子注)などの諸書に見え、日本でも『新語園』(巻七・14杜鵑付杜宇事)等に採られてよく知られる。猶、本書中巻(18鼈令江流)参照。

5 敏蔭教琴

清原敏蔭は才識あり遣唐使となり、渡唐の時船覆没するも、神助を得、波斯国に暮らすこと数年。琴曲を授けられ帰朝し、御前に奏して帝を感嘆せしめた。京極の旧宅に帰隠し、才貌にすぐれた愛娘に尽く琴曲を授けた。

出典は『宇津保物語』(俊蔭)、『扶桑蒙求』(巻中・1敏蔭教琴)は本書に依る。

6 蔡琰絶絃

琴の名手蔡邕の娘蔡琰は六歳で、弾琴していた父の琴の何番目が絶絃したか聴き当てた。

出典は『事文類聚』(続集巻二二・琴)であろう。『芸文類聚』(巻四四・琴)『白氏六帖』(巻一八・知音)『事類賦』(巻一一・琴)『群書類編故事』(巻二〇・「女知三絶絃」)『潜確居類書』(巻七九・琴)『淵鑑類函』(巻一八八・琴)などの類書もこれに近く、『珣玉集』(巻一二・聰惠篇・「蔡琰二絃」)『蒙求』(469「蔡琰弁琴」)『日記故事大全』(巻二・生知類)など多くの書に散見する故事。聴き分けた時の蔡琰の年令を六歳とするものと九歳とするもの(蒙求・珣玉集)の違いや、絶絃を二・四絃(芸文類聚・珣玉集・蒙求・事類賦・潜確居類書・淵鑑類函)、一・四絃(白氏六帖・群書類編故事・日記故事大全)とするものがあるが、本書のように十・四絃とするものは管見ではない。十は一の誤刻か。

7 時政授鱗

平(北条)時政は微賤の時に江島弁才天に祈り、神女降臨を夢にみて、子孫繁栄して天下に冠たることを予言された。神女は竜と化して去るが、後に残されたその三箇の鱗を貴重し、家紋とした。

出典は『太平記』(巻五・時政参籠榎島一事)であろう。他に『本朝神社考』(下之六・江島)『本朝故事因縁集』(巻三・榎島弁財天)などにも見える。『扶桑蒙求』(巻中・70時政授鱗)は本書からの抄出で、「黙禱七日」とその本文にあるのが証。『太平記』『神社考』など一般的には「三七日夜」(二十一日めの夜)とある。本書並びに『扶桑蒙求』は「三」を脱するか。

8 楊震感鱸

後漢の楊震は博覧窮究をもつて関西の孔子と言われた。後に三匹の鱸魚をくわえた鶴雀が、彼の教授する講堂の前に現われた。それは大夫の服の象で、三台に昇る予言と解された。その通り彼は五十の時に仕え始め、安帝の時に太尉となった。

出典は『蒙求』(57「楊震関西」)。この故事は他に『後漢書』(巻五四・楊震列伝第四四)『事文類聚』(後集巻四七・衆禽、新集巻一・三公)『潜確居類書』(巻四五・堂)『淵鑑類函』(巻三四六・堂三、巻四二〇・鶴三)等にも見えて有名なものだが、本朝の『絵本故事談』(巻七・楊震)が『蒙求』ではなく、わざわざ『統蒙求』(巻上・「伯起三鱸」)を出典としているのは興味深い。

9 仁徳煙竈

仁徳天皇は登高遠望され、炊煙の無いことから百姓の貧窮を歎かれた。そこで三年間の課役をとどめ民の苦しみを除かせたところ、五穀豊かに人々のくらしも良くなり、天皇への称賛の声が巷に満ちた。

出典は『本朝蒙求』(巻上・82仁徳望煙)。勿論もとの典拠は『日本書紀』(巻一一・仁徳天皇四年二三月)だがその直接引用ではなからう。この所謂仁徳天皇の国見の逸話はよく知られ、『本朝語園』(巻一・23仁徳天皇賑給民竈)『本朝世説』(政事・16)にも見える。『扶桑蒙求』(巻上・25仁徳煙竈)の本文は『本朝蒙求』『桑華蒙求』の系譜の流れの中にあるが、堤正勝『日本蒙求初編』(巻上・10仁徳望煙)は孫引ではなく逸話を自ら漢文化したもの。

10 虞舜薰風

舜は名を重華という。堯の相となり政治を行い、国内では舜の功績を称え、「南

風」詩を琴歌した。

出典は『十八史略』（巻一・五帝・帝舜有虞氏）。勿論舜のことは『史記』（五帝本紀第一）にも見えているが、詳細煩瑣に過ぎ、「南風之薰兮」に始まる「南風」詩も記されていない。「南風」詩は『孔子家語』（巻八・弁楽解第三五）に見えるのが有名か。

11 諸兄賜橘

橘諸兄は敏達帝の玄孫で初め葛城王と称したが、天平元年に橘姓を賜わり、名を諸兄と改めた。井手左大臣と号し七十四歳で薨じた。

出典は『本朝蒙求』（巻中・116諸兄献橘）。文中の橘姓下賜は天平八年（『続日本紀』『日本紀略』『帝王編年記』『尊卑分脈』『公卿補任』等すべて一致）であり、その誤りは『本朝蒙求』の誤記をそのまま用いたためで、後継の『扶桑蒙求』（巻上・43諸兄賜橘）も同様である。

12 叔虞剪桐

唐叔虞（周武王の子）は幼い頃兄の成王と共に遊んでいて、兄から桐葉を削って圭（珪。諸侯に封ずる印）を授けられ「侯に封じよう」と言われた。そこで史佚が式の日どりを請うたところ、「弟に戯れたただけだ」と答えたので、彼は「天子に戯言はない」と諫め、遂に叔虞を唐に封じた。

出典は『十八史略』（巻一・春秋戦国・晋）。この「天子に戯言なし」の故事は勿論『史記』（巻三九・晋世家）にも見える。また、例えば『芸文類聚』（巻八八・桐）『太平御覧』（巻九五六・桐）『事類賦』（巻二五・桐）『事文類聚』（後集巻二三・梧桐、前集巻二二・親王）『御鑑類函』（巻四一四・桐三）といった類書にも所収（『呂氏春秋』所引）。さらに、『古文真宝』（後集・弁類）に柳宗元「桐葉封弟」が所収されていることもよく知られているよう。

13 藤家南北

藤原不比等には四男があり、長男武智麻呂は南家、次男房前は北家、三男宇合は式家、四男麻呂は京家の始めとされる。

この藤家四家については特定の出典が必要であるとも思えないが、『尊卑分脈』などの系譜図が先ずは想起されようか。猶、『本朝語園』（巻一・54藤原四家）は本書に先行し、『見聞談叢』（巻四・藤原四家）などは本書に後行する記事である。『扶桑蒙求』（巻上・53藤家南北）は本書と同文でその影響下にある。

14 李氏西東

晋の司農丞李楷には五子（輯・晃・芬・勁・叡）がいた。叡の子の勗の兄弟は巷東に住み、勁の子の盛は巷西に住んだので、各々叡を東祖、芬と弟の勁を西祖と称し、輯と弟晃は共に南祖と称した。

出典は柳宗元「伯祖妣趙郡李夫人墓誌銘」（『柳河東集』巻一三）。

15 正成守義

楠正成は橘諸兄の遠胤で、河内の金剛山の西に住んでいた。後醍醐帝が笠置に行幸された時、正成の武勇・智謀あることを聞き、藤原藤房を遣わし呼び寄せた。正成は乱を収め太平の世とするには智と勇が必要と説いて帝を喜ばせ、奇計・策略は適切なものでよく勝利をもたらした。

出典は『本朝蒙求』（巻下・81正成智謀）。もともとは『太平記』（巻三・主上御夢事付楠事）に依る。猶、『絵本故事談』（巻五・楠正成）や『扶桑蒙求』（巻下・77正成守義）あたりにも『本朝蒙求』『桑華蒙求』の後を受けている。

16 孔明尽忠

諸葛孔明は誠心を以て公を治め、刑罰は厳しかったが怨む者もなかった。彼が帝に上表して、故郷成都には子孫に十分な田畑もあり、自分が死んでも余裕ある生活ができるから、陛下のお世話になることはないと言った。卒去して忠武と諡された。

出典は『十八史略』（巻三・三国・後皇帝）。但し冒頭の二十七字は『蒙求』（3「孔明臥龍」）から採っているか。猶、本文中の「史称」以下は『三国志』（巻三五・蜀書・諸葛孔明伝）の孔明卒亡後の評を記した部分から転載したものである。

17 景行火見

景行帝は葦北を発し、夜暗くなって火国に到り、遙かな火の光を目指して着岸。その村名を問われた国人は、八代県豊村と答え、また、かの火の主を尋ねられたので、何人の火でもないと言った。そこで国を「火国」と名付けた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・17景行火国）。もともとは『日本書紀』（巻七・景行天皇一八年五月一日）に見える。猶、『扶桑蒙求』（巻上・8景行火燄）は本書に依る。

18 孝武山仰

漢の孝武皇帝は元封元年に緱氏に幸し、華山の中嶽太室に登ったところ「万歳」

の声が聞こえきた。上下の者に問うが誰一人口にしたものはいなかった。そこで太室を三百戸に封じ崇高村と名付けた。

出典は『史記』（巻二一・孝武本紀第二二、巻六・封禪書第六）か。『漢書』（巻六・武帝紀第六）にも見えるが、この故事は餘りにも有名で、『初学記』（巻二・嵩高山）『事文類聚』（前集卷一三・嵩山）『円機活法』（巻四・嵩山）『淵鑑類函』（巻二七・嵩高山二）といった中国類書や日本の『世俗諺文』（巻上・16「山呼二万歳」）『文鳳抄』（巻三・山）『統教訓抄』等にも見え、平安時代の漢詩文にはよく用いられた故事。

19 河勝殺観

東国で大生部多なる者が、村里で常世神と称して虫を祭らせ、巫覡らと結託していた。そこで秦河勝は民を惑わすものとして、多や巫覡らを討ちそれをやめさせた。

出典は『本朝蒙求』（巻下・100不尽祭史）か。『日本書紀』（巻二四・皇極天皇三年七月）も殆ど同文。『日本紀略』（前篇七・皇極天皇三年七月）には大生部多・秦河勝の名は見えない。猶、『扶桑蒙求』（巻下・5河勝殺観）は本書に依るだろう。

20 西門投巫

鄴では小家の美しい女子を河伯（川の神）に献ずる風習があった。西門豹は鄴の長官となるや、献ずる良き女子がいないと河伯に知らせて来い、と大巫姫やその三弟子、また三人の土地の長老を次々に使者と称して河中に投げ込んだ。彼らの戻り報告することなきを知らしめ、悪しき俗習を一掃した。

出典は『事文類聚』（前集卷一七・衆水（水神・水怪附）「河伯娶婦」）か。本文としては上記が一番近いが、標題は『蒙求』（471「西門投巫」）に同じ。また、上記の出典となった『史記』（巻二六・滑稽列伝第六六）他、『群書類編故事』（巻三・河伯娶婦）『十七史蒙求』（巻四・豹禁河伯）『日記故事大全』（巻五・關邪類・「除河伯害」）『潜確居類書』（巻五六・人倫部九・県令・「投巫」）といった類書にも見えている。

21 義経白旗

源義経が平氏と長州赤間関で合戦した時、天より雲の如きもの下り、見ると

乗っている船には白旗がたなびいていた。彼はこれを奇驗として冑を脱ぎ拝した。出典は『本朝蒙求』（巻中・76義経拝旗）で、その末尾から抄出。勿論この逸話は『平家物語』（巻一一・壇の浦）『源平盛衰記』（巻四三・源平侍遠兵附成良返忠の事）に見えるもの。『扶桑蒙求』（巻中・44義経白旗）は本書に依る。

22 劉秀赤符

後漢光武皇帝（劉秀）は長沙王発の後胤で、『尚書』を学び大義に通じた人で、蕭王となった。その後、儒生の張華が関中より赤伏符を奉じて来り、劉秀は帝位に即き建武と改元した。

出典は『十八史略』（巻三・東漢・光武帝）。勿論『後漢書』（巻一上・光武帝紀第一上）にも見える。

23 頼之童坊

細川頼之は幼君足利義満を輔佐し、佞臣を退け、正しき人々を勧め、文才あるものを侍らせて教え導いた。法師六人を選んで異装をさせ大小刀を帯び役者の振舞をさせ、彼らは佞坊とか童坊と呼ばれた。それは彼らに嘘・偽り、阿り媚び、諸大名を侮辱嘲笑する行為をわざとさせて、義満の中に口先は上手いが心の悪しき人を憎む心を育てるためであった。

出典は『本朝蒙求』（巻中・101頼之輔佐）。他に『塵塚物語』（巻五・細川武蔵入道事）『細川頼之記』『本朝語園』（巻二・70頼之置「同朋」）などでも佞坊に言及している。

24 優旃侏儒

優旃は小人の俳優でよく人を笑わせた。始皇帝が酒宴を催した折、雨が降って衛兵達が濡れ凍えていたので気の毒に思い、戯言をかわすことで、始皇に彼らの辛い状況を悟らせた。

出典は『史記』（巻二六・滑稽列伝第六六）か。『蒙求』（357「優旃滑稽」）にも見え、本朝でも『語園』（巻下・63優旃雨ニヌレザル事）に引かれている。

25 良貞蛙歌

紀良貞は摂州住吉の女と契ったが、その後多年訪れず、再訪した時には女の行方もわからなくなっていた。海辺をさまよい行くと小さな蛙が自分の前を跳ねて、砂上に歌の文字を書きつけたように見える。そこにはあなたと愛し合ったことは忘

れていませんという趣旨のことが記されていた。

出典は恐らく『雑和集』（巻上）あたりか。『扶桑蒙求』（巻中・7良貞蛙歌）は本書に依る。

26 冶長鳥語

公治長は鳥雀のこぼを理解した。ある時鳥雀達が「白蓮水の辺に粟をひっくり返した車があり、車脚が泥に沈んで、小牛の角も折れているぞ、皆で行ってその粟を啄もう」と言い合っているので行って見たらその通りだった。

出典は梁の皇侃の『論語義疏』（公治長第五の冒頭注）か。猶、この故事は後続の『論語抄』にも受容され、『李嶠百二十詠注』（雀）『白氏六帖』（雀二九・鳥獸言）『百詠和歌』（雀）『金言類聚抄』（雀二三・「人解」鳥語三事）などにも見える。柳瀬喜代志「解鳥語譚考」（『日中古典文学論考』汲古書院・一九九九年）参照。類話に楊宣の覆粟を知る故事（『芸文類聚』巻九二・雀では『益都耆旧伝』所引。『事文類聚』後集巻四五・雀）もある。

27 教道硯蓋

藤原公任は娘が教通公に嫁ぐ時、自ら『和漢朗詠集』を撰して進物（賀引出物）とした。

出典は『十訓抄』（巻六・可レ存三忠信廉直旨一事）。『和漢朗詠集抄注』（永済注）、『後拾遺抄注』などにも同様のこと見える。

28 李漢文序

李漢は韓愈に仕えて古学に通じ詞才があり、愈に愛重されてその娘を妻とした。

出典は『古文真宝後集諺解大成』（序類）の「集昌黎文一序」の注であろう。猶、李漢の伝は『旧唐書』（巻一七一・李漢伝）『新唐書』（巻七八・李漢伝）に見える。

29 実定鳳闕

治承四年摂州福原に遷都した。諸卿が中秋賞月のために住吉や須磨などに出かける中で、徳大寺実定だけは旧都の月を恋い京の旧宮（鳳闕）へと歌を吟じつつ帰った。

出典は『平家物語』（巻五・「都遷」「月見」、或は『源平盛衰記』（巻一七・「福原京の事」「人々名所々々の月を見る事」「実定上洛の事」「待宵侍従付優藏人の事」）か。『扶桑蒙求』（巻上・34実定旧闕）は本書に依る。

30 袁宏牛渚

晋の袁宏は逸才の持主で美麗な文を作った。謝尚が牛渚を治めていた時、秋夜月下に左右の者と微服して舟を浮かべ遊んでいると、袁宏も舟中に声清らかに詩を吟じていた。その素晴らしさに謝は呼び迎えて共に終夜語り合い、宏の名声は高まった。

出典は『蒙求』（112「袁宏泊渚」）。この故事自体は『晋書』（巻九二・列伝第六二・袁宏）『世説新語』（文学・88話）『事文類聚』（前集巻二・月「牛渚泛月」）や『潜確居類書』（巻三四・磯「牛渚磯」）などにも見え、本朝の『絵本故事談』（巻八・袁宏）にも採られる。

31 節信贈墓

帯刀の節信は能因と共に歌人として知られる。時に二人はめぐり会い、能因が錦囊の中から長柄橋建設の時の木屑を贈ってくれたのに感謝し、節信は身につけていた井手の蛙の干物をプレゼントしたところ能因も喜んだという。物好きとはそんなものだ。

出典は『袋草紙』（巻三・雑談）。『百人一首一夕話』（巻六・能因法師）にもこの話は引用され、『扶桑蒙求』（巻中・28節信乾蛙）は本書に依るだろう。

32 子産献紵

晏平仲は鄭に招かれて子産に会い旧友に会った心地がし、縞帯を与えたところ、子産は彼に紵衣（麻の衣）を献じた。

出典は『春秋左氏伝』（襄公二九年）。

33 道長牛仏

江州関寺の御堂を造営する時に活躍した牛を、ある人が借り受け使おうとしたところ、夜その人の夢に牛が現われ、自分は迦葉仏の化身であると語った。それから牛仏として人々に尊ばれるようになり、藤原道長公も敬い信じられたとか。

出典は『栄花物語』（巻二五・みねの月）か、それを出典と明記する『本朝語園』（巻九・436牛仏）であろう。勿論『今昔物語集』（巻一二・関寺驅牛化迦葉仏一語第二四）『古本説話集』（巻下・関寺の牛の間む事第七〇）にも詳しく記され、『古事談』（巻五・神社仏寺・38関寺霊牛事）『世継物語』『関寺縁起』等の説話類から、『左経記』（万寿二年五月一六日）『扶桑略記』（寛仁五年〔治安元年〕一一月一一日）『日本紀略』（万寿二年五月一七日）などの歴史記録に至る迄、文の長短は

さまざまだが、この牛仏の逸話に触れており、よく知られたものであった。猶、『扶桑蒙求』（巻中・78道長牛仏）は本書に依っている。

34 臧孫鷄鷄

臧文仲には不仁が三つ、不知が三つある。つまらぬ装飾を好んだこと（虚器）、しかるべき順序に逆らって祀ったこと（逆祀）、鷄鷄という鳥を珍しいとして祭ったこと。これが三不知である。

出典は『春秋左氏伝』（文公二年）であるが、その直接的引用ではなく某書の孫引きかも知れない。

35 有国長押

藤原道長が東三条邸を建てた時、藤原有国は監督役を勤めた。南廊の長く差出た一間の両柱の上部に承塵（長押）をうたなかつた。数年後、道長女徳子が皇后に立てられた時、その南廊を出て上車したが、それは有国が前もって承塵を作らず、後の車が入りできるようにしておいた先見の明に依るものであった。

出典は『古事談』（第六・亭宅諸道・3東三条造殿の時藤原有国奉行の事）か、『十訓抄』（第一・可レ定ニ心操振舞一事・32有国上長押）あたりであろう。他に『本朝語園』（巻四・211長国長押）『扶桑蒙求』（巻中・83有国長押）にも見えるが、後者は本書に依るもの。

36 于公高門

前漢の于定国の父は県の獄吏や裁判官を勤め公平な判決を下したので恨みを抱く者はなく、生きながらに祠を建てて祀られた。彼の住んでいた村の入口の門が壊れた時、彼は四頭立ての馬車が入れる大きな門を作らせた。獄吏としての陰徳多く、子孫には必ずや出世する者が出てこの門を入りするだろうと言うのだったが、果たして子の定国や孫の永のように侯となる者が出た。

出典は『蒙求』（85「于公高門」）。勿論『漢書』（巻七一・雋疏于薛平彭伝第四一・于定国伝）にも見え、『芸文類聚』（巻六二・門。『説苑』所引）『太平御覧』（巻一八二・門上。『説苑』所引）『事文類聚』（統集卷七・門）『潜確居類書』（巻五八・大理）等類書にもよく見える。

37 藤原掛冠

藤原藤房は後醍醐帝に忠勤してしばしば諫言するが聴き入れられなかった。出雲

より龍馬を献上された帝は、天馬来る吉事とみて悦び、群臣も称賀する中、藤房は中国の天馬出現の故事にかこつけて戦乱後の不安定な時に奇物を翫ぶことをやめ、徳政を施すことが肝要だと諫めた。だが、帝が怒り聴入れなかつたので彼は北山に退隠した。すると帝は驚嘆しひどく後悔した。

出典は一応『太平記』（巻一三・龍馬進奏事）「藤房卿遁世事」かと思うが、林羅山「藤原藤房伝」（『林羅山文集』巻三八・伝下）に近い部分もある。他にこの故事は『本朝遼史』（巻下・藤原藤房）『扶桑隱逸伝』（巻下・藤原藤房）『本朝蒙求』（巻中・70藤房棄官）『本朝語園』（巻七・317藤房隱遁）などにも見えている。猶、『扶桑蒙求』（巻中・66藤原掛冠）は本書に依り、『瓊矛餘滴』（巻下・藤房一去）は独自の本文。

38 辛毘引裾

魏文帝は冀州の民十万户を河南に移住させようとした。群吏は連年の蝗害で不可と考えていたが帝の強い姿勢の前に何も言えずにいと、辛毘が敢えて諫言する。帝が聴き入れず奥の部屋に入ろうとしたので、毘はその裾にとりすがり、後に帝の譲歩をえた。

出典は『蒙求』（70・「辛毘引裾」）。他に勿論『三国志』（巻二五・魏書・辛毘）や『君臣故事』（巻上・臣事門・「辛毘引裾」）『金壁故事』（巻四・毘引三衣裾「見二諍臣」）等の類書にも見える。

39 正行療創

楠正行（正成長男）は二五歳の時、細川顕氏・山名時氏と闘うも退く。安部野の戦の時渡辺橋が落ちて、敵兵五百餘人が水に溺れたのを目にし、慙れみ助けて衣や食糧を与え、体を温め薬を与えて治療に当らせた上、馬を支給して送還した。後に正行の恩情に感じ入った彼らは四条縄手の合戦で皆討死にした。

出典は『本朝蒙求』（巻中・74正行療創）。もともとは『太平記』（巻二五・「藤井寺合戦事」「住吉合戦事」、巻二六・「正行参三吉野一事」）に見える。また、『扶桑蒙求』（巻中・69正行療創）は本書に依る。

40 呉起吮疽

呉起は用兵にすぐれていた。曾子に学び魯君に仕えたが信頼されず、去って魏文侯に事えた。彼は将となり秦を撃ち五城を抜く活躍をする。最下の士卒とも衣食・労苦を共にし、ある時彼は兵の病む腫れ物の膿を吮い出した。すると兵の母はその

話を聞いて大声で泣いたのでわけを尋ねると、その子の父は呉起が膿を吮つてくれたのに感激して死を恐れず討死したが、息子も同様にどこぞで戦死することになるだろうと答えた。

出典は『史記』(巻六五・孫子呉起列伝第五)、『十八史略』にも見えるものの本文は少し遠い。この故事は有名で白居易「七德舞」に「含血吮_レ瘡撫_二戰士_一」と詠込まれた(『平治物語』巻上・冒頭にも引用)のはよく知られ、『芸文類聚』(巻五九・将帥)『測鑑類函』(巻二〇七・将帥)等類書にも所収される。

41 孝徳大化

孝徳天皇即位の初めに元号を立てて大化元年とされた。

特に出典を挙げる必要はないかも知れない。例えば『日本書紀』(巻二五・孝徳天皇即位前紀)『日本紀略』(前編七・孝徳天皇)『扶桑略記』(第四・孝徳天皇)『帝王編年記』(巻九・孝徳天皇)『元亨釈書』(巻二一・資治表二・孝徳天皇)等の歴史書に記載されていてよく知られていることだろう。『扶桑蒙求』(巻下・54孝徳大化)は本書に依る。

42 漢武建元

漢の孝武帝が即位して始めて建元とし、年号ここに始まる。

出典は『十八史略』(巻一・西漢・孝武皇帝)。猶、『漢書』(巻六・武帝紀第六)には建元元年の顔師古注に「自古帝王一未有_二年号_一」,「始起_二於此_一」とある。

43 伏翁如啞

伏見翁は菅原寺の側に臥して三年、起きず、言わずだったので、人は啞者^{おし}と思つたが、天平八年に行基法師が波羅門僧菩提を迎え、菅原寺に帰つて来ると、翁もにわかに入つた。

出典は『元亨釈書』(巻一五・方志・伏見翁)。この話は他に『本朝神社考』(下之六・伏見翁)『扶桑隱逸伝』(巻上・伏見翁)『本朝蒙求』(巻下・21伏翁啞態)『本朝列仙伝』(巻二・伏見翁)『本朝語園』(巻九・428伏見翁)など諸書に見える。猶、『扶桑蒙求』(巻中・30伏翁如啞)は本書に依る。

44 浄名無言

維摩会で文殊菩薩は無言・無説・無示・無識にしてすべての問答を去ることが菩薩入不二門であると述べ、ついで維摩詰に菩薩入不二門とは何かと問う。摩詰は黙

然として無言のままであったが、文殊はそれを賛嘆した。
出典は『禪苑蒙求』(巻上・維摩默然)、『維摩經』(八章・入不二法門)とも関わる。

45 川成図障

飛驒匠某は百済川成と技芸を競う友人である。匠の造った廬の壁に絵を依頼されて川成がやって来ると、四面に戸があり、入ろうとすると閉じて反封側が開くという仕掛けになっている。匠は戸惑う川成を嘲笑する。他日、川成は己の技量を見せようと匠を家に招く。匠が中に入ると傍に腐爛した死尸がある。彼が驚き怪しみ進みかねていると、何とそれは川成が障^{からかみ}に描いたものだった。

出典は『今昔物語集』(巻二四・百済川成飛驒工挑語第五)か。もともと『本朝語園』(巻五・260川成与飛驒匠一挑二細工)『今昔』所引)にも見えている。猶、川(河)成のことは『文徳実録』(仁寿三年八月二四日卒伝)『本朝画史』(巻上・上古画録)に見えるが、飛驒匠との話は記されていない。また、『扶桑蒙求』(巻中・84川成図障)は珍しく本書からの簡単な抄出ではなく、本書の本文を書改め再構成したかに思われる。

46 荀勗画門

鍾会は荀勗といとこ同士だったが仲が悪かった。勗は百万銭もする剣を母の鍾婦人に預けていた。書が巧みだった会は勗の筆跡を真似て手紙を書き送り、剣をまんまと取りよせ返さなかった。その後、鍾会兄弟が千万銭をかけ邸宅を建てるや、勗はその引越しの前に行つて、門の傍の堂に兄弟の亡父鍾繇の画像をそっくりに描いた。すると兄弟は門に入るやひどい悲しみに襲われ、やがてその家に住む人もなく荒れ果てた。

出典は『世説新語』(巧芸・4話)。勿論『三国志』(巻二八・魏書・鍾会伝)『世説新語』所引)や『太平御覧』(巻一八〇・宅、卷三四三・劍中)『潜確居類書』(巻八九・劍)などの類書にも見える。

47 保胤禅林

慶滋保胤は文章冠絶の人で、菅原文時に師事し高弟となった。少年時から仏教を慕い、『日本往生伝』(日本住生極楽記)を著し、娘の成人後に出家し、四方を游歴した。動物をいづくし、長徳三年に東山如意輪寺で卒した。

出典は『扶桑隱逸伝』(巻中・13慶保胤)と『本朝文粹』(巻一〇・277「暮秋勸学

会於三禪林寺「聴レ講ニ法華經」同賦三聚レ沙為ニ仏塔」の冒頭一節を利用）。このこと他に『続本朝往生伝』（31慶保胤）にも見え、『扶桑蒙求』（巻中・16保胤禪林、94保胤解纓）に影響を与えた。

48 韓愈慈恩

慈恩寺は隋の無漏寺の跡に創建。貞観年間に高宗が文德皇后の為に建てたので慈恩の称がある。

出典は韓愈「慈恩寺塔題名」（『韓昌黎文集』所収）とその注。

49 小角虎隊

道昭は一匹の虎の依頼を受け群虎に『法華經』を講じたところ、和語を用いる者がいて、自分は日本の役小角だという。驚きここに在るわけを尋ねると、日本の神は心がねじ曲つていて媚び諂う奴ばかりで厭になり、逃れてここで虎になっていると答えた。

出典は『元亨釈書』（巻一五・方応・役小角）。もともとは『日本霊異記』（巻上・孔雀王の呪を修持し異しき験力を得もちて現に仙となりて天に飛ぶ縁第二八）『今昔物語集』（巻一一・道昭和尚且唐伝三法相一還来語第四）『三宝絵』（巻中・2役行者）『扶桑略記』（第四・孝徳天皇白雉四年）『因縁集』（通鳥語「元興寺道昭姓船氏云々」）『本朝神社考』（中之四・葛城神）『本朝列仙伝』（巻一・役小角）等諸書に見える。猶、大江匡房『本朝神仙伝』（3役優婆塞）ではこの行者は道昭の法話を聞いてはいるが虎になっていたとは記さない。『扶桑蒙求』（巻下・34小角虎隊）は本書の抄引。

50 左慈羊群

左慈は道術を学んで鬼神を使い、天柱山で思いを凝らし『石室九丹金液經』をえ、様々な変化の術を行ったので、曹操に召された。後に曹操に殺されそうになって羊の群れの中に逃げ込み変身した。

出典は『神仙伝』（巻八、左慈）か。左慈の左記の逸話は他に『後漢書』（巻八二下・方術列伝第七二下・左慈伝）『搜神記』（巻二）『芸文類聚』（巻九四・羊）『太平御覧』（巻九〇二・羊）『太平広記』（巻一一・左慈）『群書類編故事』（巻二四・左慈化羊）『事文類聚』（後集巻三九・羊）『測鑑類函』（巻四三六・羊二）といった類書、並びに『雲笈七籤』（巻五）『真仙通鑑』（巻一五）『仙苑編珠』（巻上）『玄品録』（巻二）等の神仙譚にも見えている。猶、本朝でも『絵本故事談』（巻一・左

慈）に引かれるが、『新語園』（巻九・16左慈釣ニ鱸魚）は鱸魚を釣る故事は引くものの、後の羊と化することは記さない。

51 興風昔友

藤原興風は和歌に秀れ、定家の『百人一首』に「誰をかも識る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」（『古今集』909）が採られている。

特に出典は限定しなくても良からうか。敢て言えは『古今集』、或は『百人一首』かその注釈書ということになる。猶、『扶桑蒙求』（巻下・81興風恋友）は本書に依らう。

52 子猷此君

王子猷は呉の大夫の家に好竹があるのを見、竹下に至り久しく諷詠していた。また、かつて空宅を借りて竹を植えさせ、語って言うに、どうして此の君（竹のこと）なくておれましよう、と。

出典は『事文類聚』（後集巻二四・竹）か、『晋書』（巻八〇・列伝第五〇・王羲之付王徽之伝）であろう。勿論この故事は『枕草子』にも用いられているようによく知られる。『世説新語』（任誕・46話）『蒙求』（176「子猷尋戴」）『事類賦』（巻二四・竹）『太平御覧』（巻九六二・竹上）『群書類編故事』（巻二三・不レ可レ無ニ此君）『円機活法』（巻二二・竹）『書言故事』（巻一〇・花木題）などの類書にも見え、本朝でも『絵本故事談』（巻六・王子猷）に採られている。

53 赤染怨歌

大江匡衡の妻赤染右衛門は夫が稻荷祢宜の娘に通うのを怨み、歌を作ったのか家に送りつけた。匡衡は大いに恥じ夫妻仲はもとの如くになった。

出典は『今昔物語集』（巻二四・大江匡衡妻赤染読和歌語第五二）か、『本朝語園』（巻二・和歌・120匡衡感赤染之哥）であろう。その時の詠「わが宿の松はしるしも」云々は勿論『赤染衛門集』（詞書に「今はたえにたりといふ所に、ありと聞きてやる」とある）に所収。

54 若蘭回文

晋の竇滔の妻蘇若蘭は夫が流沙に徙されたのを思い、回文詩八百餘字を織込んだ錦を送ったが、何とも思いの込めたものであった。

出典は『晋書』（巻九六・列伝第六列女・竇滔妻蘇氏）か。他に『事類賦』（巻

一〇・錦)『事文類聚』(統集巻二一・錦繡)『測鑑類函』(巻一九八・詩二・巻三六五・錦四)等にも見える。猶、妻の作った回文七言詩は『初学記』(巻二七・錦)『秘府略』(巻八八三・錦)でも知られる。猶、この逸話は『新語園』(巻二・30織・錦字詩二)にも採られている(出典を「唐書武俗紀・織錦璇璣図」としている)。

55 良繩所天

藤原良繩は風容閑雅、天性謹孝な人であった。赴任先の父が病で危篤状態になり、良繩はかけつけようとするが許されなかった。訃報を聞き、血を吐き息も絶えたが、数刻して蘇生した。

出典は『三代実録』(貞観一〇年二月一八日卒伝)か、『本朝孝子伝』(巻上・10藤原良繩)であろう。また、『本朝語園』(巻二・73良繩謹孝)にも見えている。猶、良繩卒伝では父の場合のみならず、母の病と死にも心を碎いていたことが記されている。

56 仁傑望雲

唐の狄仁傑は并州法曹参軍を授けられ任地に在ったが、親は河陽に住んでいた。太行山に登っては白雲がぼつんと空行くのを眺めて言った。わが親はあの雲の下におられる、と。久しく見ていたが雲も移ったので彼も立ち去った。

出典は『統蒙求』(巻一・36仁傑望雲)。他に『十八史蒙求』(巻一・仁傑顧雲)『日記故事大会』(巻三・孝念類・望雲而思)『旧唐書』(巻八九・列伝第三九・狄仁傑)『新唐書』(巻一一五・列伝第四〇・狄仁傑)『測鑑類函』(巻五・雲二)などに見える。

57 久米染心

久米仙人は深山に入り仙法を学んだ。ある時空を飛び故里を通り過ぎた時、たまたま婦人が衣を踏み洗っていた。その脛の白さを目にして心が汚れ墜落してしまった。

出典は『元亨釈書』(巻一八・願維一〇之三・神仙五・久米仙)か、『本朝蒙求』(巻下・22久米染心)であろう。周知のようにこの話は有名で、『本朝神仙伝』(久米仙事第八。現存欠で『和州久米寺流記』巻一〈久米仙人経行事〉で補う)『今昔物語集』(巻一一・久米仙人始造・久米寺・語第二四)『久米寺縁起』『扶桑略記』(巻二三・延喜元年八月古老相伝)『発心集』(巻四・42肥州の僧の妻、魔となる事

付悪縁を恐るべき事)『徒然草』(八段)『本朝神社考』(下之五・久米)『本朝語園』(巻九・425久米仙人)等諸書に引かれる。また、後の『絵本故事談』(巻三・久米仙人)は恐らく『本朝蒙求』の引用であろうが、『扶桑蒙求』(巻中・25久米染心)は本書の転用であろう。

58 摩達愛欲

達摩達は師子尊者の後嗣になれなかったことを恨んだ。谷川を渡る時、女子が脛を出して洗濯をしているのを見て、「こんなにも白いものか」と言うと、尊者がすぐにやって来て、今のその心では後嗣にはできないと言うのであった。

出典未詳。

59 博雅琵琶

城南の小幡山こはたの麓の盲人はよく琵琶の三秘曲を奏でた。源博雅は毎夜その山麓にゆき庭草に伏し隠れ、百夜ならんとして遂にその秘曲を得た。

出典は『本朝蒙求』(巻中・15博雅三曲)か。猶、博雅の三位が盲人(蟬丸とする話もある)から秘曲を得る話は『江談抄』(第三・63博雅三位習琵琶一事)『今昔物語集』(巻二四・源博雅朝臣行二会坂盲許・語第二三)『文机談』(巻二)『和歌童蒙抄』(第五・宮)『楊鳴曉筆』(巻一八・14流泉啄木調)『源平盛衰記』(巻三一・青山の琵琶流泉啄木の事)『雑々集』(8博雅三位事)『世継物語』『扶桑隱逸伝』(巻上・木幡山盲僧)『本朝語園』(巻七・361博雅琵琶)等から、更に本書の後には、『絵本故事談』(巻八・博雅)『大東世語』(巻四・棲逸・2話)『本朝世説』(巻下・巧芸・13話)『日本蒙求初編』(巻上・蟬丸秘曲)『瓊才餘滴統編』(巻中・博雅蟬丸)などと広く長く受継がれている。

60 楊志楽曲

楊志は楽史で琵琶が得意であったが、その姑はそれにわをかけて技量が優れていた。彼女はもと宣徽の弟子で、後宮を出た後は永穆観に住んでいた。自分の芸を惜しみ人に聞かれるのを畏れた。楊志が教えを乞うと断られたので、永穆観の持主に贈物をして寄宿させてもらい、こっそりと姑の演奏を聴き帯に記録した。翌日姑の前で奏してみせると彼女は驚嘆し、彼に尽く伝授した。

出典は本文の冒頭に唐・段安節『楽府雜録』と記されているのでそれで良さそうだが、例えば『測鑑類函』(巻一八九・琵琶三)の「脂韞帶」の注としてほぼ同文が見えることからすると、存外類書からの引用かも知れない。

61 実方撲冠

藤原実方は和歌・楽舞にすぐれていた。ある日藤原行成と殿上でいさかいをして怒りのあまり笏を振って行成の冠を打落した。行成は落着き払ってその訳を問うが、実方は恨み恥ぢて立ち去った。これを御覧になった一条天皇は実方を奥州刺史に左遷。彼は謫所で没した。

出典は『十訓抄』（第八・可レ堪忍諸事一事・1大納言行成卿と実方中将との口論、或は『古事談』（第二・臣節・132行成殿上にて口論の事並びに栄達の事）あたりか。猶、この故事は「歌枕見て参れ」につながるものとして有名で、『東斎随筆』（鳥獸三・21話）『源平盛衰記』（巻七・日本国広狭の事）や尾崎雅嘉『百人一首一夕話』（巻四・藤原実方朝臣）『瓊矛餘滴』（巻中・実方歌枕）などにも所収される。『扶桑蒙求』（巻下・実方落幘）は本書に依る。

62 蔡系擲褥

征虜亭で支道林の饒宴が行われた時、蔡系は早く来たので林公に近い席に着いたが、謝万は遅れて遠い席になった。系が席を立つとそのスキに万が座を移した。系は戻って来ると、万を數物ごと持ち上げ放り出し、元の自分の席に坐った。万は冠を正し衣の塵を払い、平然と自分の席についてから、「お前は変わりもんだ、わしの顔をつぶしおって……」と言うと、系は「お前の顔などはなから頭にないさ」と答え、その後互いに気にとめるようなこともなかった。

出典は『世説新語』（雅量・31話）。『晋書』（巻七九・列伝第四九・謝万）にも見える。

63 室町記文

足利義政は嫡男の義尚に命じて先祖の逸事を調べさせた。その話の中には將軍家に諂（よこしま）い阿（あ）り、信用しかねるものも多かった。ある人が私記を献じたが、その中に幕府將軍家を二、三批判するところがあったので義尚は喜び感謝した。

出典は『天文雜説』（巻三・18室町殿家被レ尋二記録一）か、或はそれを典拠に掲げる『本朝語園』（巻五・241室町將軍求二記録一）であろう。『扶桑蒙求』（巻下・50室町記文）は本書に依る。

64 順宗実録

初め韓愈が『順宗実録』を撰し宮中の事を懇切正直に記したが、宦官は喜ばず事実でないとして述べたので、帝は路隋に修正を命じた。路隋が申し上げるには、史書の

記述に褒貶はつきものである、身分の低い者の善惡として嘘は記せないし、まして人の上に立つ君主であれば猶更のことである、と。

出典は『新唐書』（巻一四二・列伝第六七・路隋）か。『旧唐書』（巻一五九・列伝第一〇九・路隋）にも見えるが、記事本文は前者に近い。また、『新唐書』の記事は『測鑑類函』（巻五三・実録）にも引かれるから、所謂類書との関係も考えられよう。

65 谷雄他国

紀長谷雄が長谷寺に祈願したところ、夢に観音のお告げがあり、「そなたは文才に優れているから他国に派遣したいと思う」という。彼はその意味がわからなかったが、都に還るやほどなく病没した。

出典は『江談抄』（第一・38紀家参三長谷寺一事）か、『今昔物語集』（巻二四・三善清行案相与三紀長谷雄一口論語第二五）であろうか。或は『本朝語園』（巻四・187長谷雄薨逝）とも関わるか。本書文中に「心願」とあるのを前掲三書は大納言の位を望むことと明記している。猶、『扶桑蒙求』（巻上・37谷雄他国）は本書に依る。

66 卜商冥府

蘇韶が死んで、甦（よみがえ）ってから言うには、顔淵と卜商は地下世界で修文郎になっている、と。

出典は『蒙求』（183蘇韶鬼霊）か。但し本文を比較する限りでは徐注本より古鈔本（宮内庁書陵部）に近いようにも思われる。猶、『太平広記』（巻三一九・蘇韶）にも見え、『古鈔本蒙求』や本書同様に王隠『晋書』を典拠と記す。

67 本康薫物

本康親王は仁明帝の息子で、香癖があり、薫物を合わせて黒方・侍従などと命名した。

出典は『河海抄』（巻二二・梅枝「八条の式部卿のほうをつたへて」注）か。黒方・侍従の香名については『薫集類抄』（上）にも見えている。また、『扶桑蒙求』（巻中・76本康薫物）は本書に依る。

68 劉安豆腐

豆腐は漢の淮南王劉安に創まる。黒・黄・白の豆や泥豆・豌豆・緑豆の類で作る。造法は水に浸して碎き、濾（こ）し煎（い）て、塩鹵（しお）か山礬葉を用いて沈澱（しんでん）したものを釜（か）やか

めに入れて、石で圧力をかけて作る。豆腐の皮(ゆば)という結構なものもできる。

出典は『本草綱目』(巻二五・豆腐)か。それを引用している『和漢三才図会』(巻一〇五・造釀・豆腐)も本書本文と同じだが、本書の刊行の方が先行する。

69 雅忠小童

丹波雅忠は夢中で七、八歳の小童に告げられる。昔君の祖先の康頼が蔵書を守って欲しいと私に心をこめて祈ったので多年守ってきたが、近日火災が起こるから、予め備えよ、と。家は焼けたが書物は無事で、医術で世に名声を得ることとなった。出典は『続古事談』(第五・諸道・3守宮神典薬頭雅忠に火事あるを告ぐる事)か。或はそれを引用する『本朝語園』(巻七・331雅忠顧三庖瘡)であろう。『扶桑蒙求』(巻中・32雅忠小童)は本書に依る。

70 医緩二暨

晋の景侯が病み、秦に医者求めてきたので、医緩が赴くことになった。すると景侯の夢に病が二人の童子となって現われ、「緩は良医で自分達が傷われる、何とか逃げられないか」と案じ、膏の上、膏の下に移ったため、さすがの緩も治せなかった。

出典は『春秋左氏伝』(成公十年)か。但し、『芸文類聚』(巻七五・医)『太平御覧』(巻七三六・惣叙疾病上)『群書類編故事』(巻一四・病在三膏膏二)『十七史蒙求』(巻五・晋景膏膏)『事文類聚』(前集巻三八・医者)『測鑑類函』(巻三二二・医)等の類書に引かれる本文にもかなり近い。

71 微妙慕親

名妓微妙は源頼家に招かれ鎌倉に来て歌舞した。比企能員によると彼女の遠来は愁訴の為という。問うと、父為成は讒訴され獄に繋かれ奥州に送られた。幼少より芸を学んで父との再会を思い生きて来たと言えたので、頼家は哀れみ父を帰還させようとしたが、父は既に亡せていた。彼女は悲悔し榮西に仕え尼となった。

出典は『本朝孝子伝』(巻下・10舞女微妙)か、『本朝語園』(巻二・78微妙慕親父)であろう。もともとは『吾妻鏡』(建仁二年三月八日、一五日、六月二五日、八月五日、一五日など)に見え、『本朝列女伝』(巻七・微妙)にも採られている。『扶桑蒙求』(巻中・74微妙慕親)は本書に依る。

72 緹縈請父

漢の淳于意が罪を犯し処刑されることになったが、娘の緹縈は上書して自分が奴婢となり父の刑を贖いたいと述べたので、帝は哀れみ死罪を除いて別の刑に処した。出典は『十八史略』(巻二・西漢・孝文皇帝一三年)。猶、この故事そのものは『史記』(巻一〇五・倉公列伝第四五)『漢書』(巻二三・刑法志第三)はもとより、『芸文類聚』(巻二〇・孝)『潜確居類書』(巻五九・女子附)『測鑑類函』(巻二七一・孝二)等の類書にも見え、本朝でも『新語園』(巻一・49少女救父)に採られている。

73 高光文選

藤原高光は『文選』の『三都賦』を暗誦し羽林次将(近衛少将)を拝したが、世を厭い出家し山に入った。

出典は『本朝遼史』(巻上・藤原高光)か、『扶桑隱逸伝』(巻中・藤原高光)、或は上記の影響を受けたと思われる『本朝語園』(巻四・200高光暗誦文選二)であろう。高光の出家については、『多武峯少将物語』『栄華物語』(巻一・月の宴)『宝物集』(巻四)『長谷寺靈驗記』(巻下第一五・高光少将夫妻出家発心修行事)『三国伝記』(巻一〇・第二四・高光少将遁世事)等諸書に見える。猶、『三都賦』のことはもと『九曆』(天曆二年八月一九日)の記事に依っており、それを『遼史』以下の近世書が受継いでいるようだ。『扶桑蒙求』(巻上・39高光文選)は本書に依る。

74 伏勝書経

漢が興り学校が開設された。洛南の九十歳を過ぎた伏生なる者が口伝で教授したと伝える二十餘篇の書が『尚書』である。

出典は孔安国『古文尚書序』(『文選』巻四五にも所収)で、その一節を抄出したもの。

75 安德沈海

平宗盛ら安德帝を擁して西海に赴くも、戦は利あらず讃岐屋島より長州赤間関へと移り、源義経に追いつめられ、知盛の奮戦あるも、遂に帝は二位尼に抱かれて剣璽と共に海底に沈んだ。

出典は敢て記すなら『平家物語』(巻一一・屋島、壇浦・早剱)か、『源平盛衰記』(巻四二・屋島合戦、巻四三・二位禪尼入海)などであろうか。また、『吾妻

鏡』（巻四・文治元年三月条）にも源平合戦の記述はある。猶、『扶桑蒙求』（巻上・36安德沈海）は本書に依る。

76 帝昺没涙

宋の端宗皇帝昺は八歳で即位し、陸秀夫が左丞相・樞密使として支えてきたが（亡国への道はとめられず）、仕える者達は旧日を思い涙した。禪興二年二月元軍は勝利を重ね朝廷に迫るが、張世傑は蘇劉義と共に舟を繋ぐ綱を断ち十六舟を奪って逃げ、一方、秀夫は帝の舟で脱出を計るが不可能と知り、妻子を海に飛込ませ、自分も帝を背負って入水した。

出典は『十八史略』（巻七・南宋・帝昺）。

77 時頼旅宿

平（北条）時頼は万民の疾苦を知る為に微服して諸国をまわった。ある宿主が星が宿に降ってくるのを見て、天下の執権が来ると思っていたら時頼が来たのだった。時頼は彼を天文博士にとりたてた。

出典は『本朝神社考』（下之六・泰親）か、それを引く『本朝語園』（巻七・351宿主天文）だろう。他に『天文雑説』（巻六・最明寺時頼事）にも見える。時頼の廻国説話は早く『増鏡』『太平記』『北条九代記』『北条時頼記』（元禄四年刊）の諸書や謡曲『鉢の木』でも有名で、浄瑠璃本にも見え、一般に広く浸透していたようである（佐々木馨『執権時頼と廻国伝説』（吉川弘文館・一九九七年）。猶、『扶桑蒙求』（巻下・13時頼旅宿）は本書に依る。中韓を含む比較文化史的視点からの『水戸黄門「漫遊」考』（金海南・新人物往来社・一九九九年、金文京・講談社学術文庫・二〇一二年）もある。

78 陳寔徳星

陳寔は子らを連れ荀季和を訪れた。その夜、徳星が集まった状態が見られたので、太史はこの五百里内に賢人が集まっていると奏上した。

出典は『事文類聚』（前集巻二・星）か。ただし、『世説新語』（德行・6話）『蒙求』（99「荀陳特星」）や『初学記』（巻一・星）『太平御覧』（巻七・星下）『円機活法』（巻一・星）『金鑒故事』（巻五・徳星光映「群賢聚」）『淵鑑類函』（巻四・星）といった諸類書にもほぼ同文が見える。

79 義堂台瓦

源基氏は鄴瓦硯を所蔵しており、義堂周信にその記を作らせた。その大意は、この硯は我が国に伝えられて千餘年、いまだにその真贋はわからないということである。

出典は『本朝語園』（巻一〇・549鄴瓦硯）。猶、義堂周信の記とは「源府君所蔵銅雀研記」（『空華集』巻一八・記）のこと。他に『蔭涼軒日録』（文明一九年二月三日）にも鄴瓦硯のこと見える。

80 唐庚硯銘

唐庚は文才があり進士に挙げられた人である。所蔵する古硯の銘と序を作り言うことには、硯は鋭利ではなく頑鈍を体とし、挙動することなく安静をもって用とする。この鈍と静なる故にこそ長持ちするのである、と。

出典は『古文真宝諺解大成』（後集・銘類・唐子西「古硯銘」）であろう。唐庚の説明もその作品注記に記されている通りである。

81 安世水車

良峯安世は淳和帝の弟で、才芸に優れて大納言になった。天長六年五月に勅を奉じ、諸国の民に水車を作らせ農耕の資とさせた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・73安世水車）。この逸話はもともと『政事要略』（巻五四・交替雑事・「溝池堰堤」）『類聚三代格』（巻八・農桑事）『日本逸史』（巻三七・淳和天皇天長六年五月二七日）あたりの記事が土台になっているよう。猶、『絵本故事談』（巻四・安世）や『扶桑蒙求』（巻上・50安世水車）は『本朝蒙求』や本書の影響下にある。

82 胡宿石塘

胡宿はさわやかで清新な議論をする誠実な人柄であった。二十餘年間文館に勤め、後進に「富貴貧賤は天命に依る。諸君らは己を修めてその時を待て」と教訓した。宋の仁宗の時に十年間翰林に在り、位は枢副に至り文恭と諡された。湖州を治めた時、石の塘を百里に渡って築き水害をなくしたが、それは「胡公塘」と呼ばれた。直接の出典は未詳。その逸話自体は『宋史』（巻三二八・列伝第七七・胡宿）にも見え、後進に語った言葉は『箋注純正蒙求』（巻中・胡宿進退）にも記される。

83 廷尉流弓

元暦元年讃州の檀浦（屋島の浦の誤り）の合戦の時、源氏は陸に平家は海に船を浮かべ、激しく対峙戦闘した。源義経は弓を奔流に落としてしまい、馬に鞭うち弓を逐う。一方で敵は熊手で義経の兜をひっかけようとする。それを見た義経の老臣が言う「御身こそが大事。たった一張の弓をそんなに惜しむのは間違いだ」と。義経は「この弓が敵方に渡ったら我が身の矮身弱力が知られ嘲笑される。命より名を惜しむのだ」と答え人々を感動させた。

出典には『平家物語』（巻一一・扇的）、或は『源平盛衰記』（巻四二・屋島合戦附玉虫扇を立て与一扇を射る事）を一応挙げておくが他の可能性もなくはない。有名な那須与一の扇の的の段の後に続く所謂弓流しの章段である。猶、『扶桑蒙求』（巻中・36廷尉流弓）は本書に依る。

84 閻閻失

呉と楚が長峯で戦い、楚軍が呉を破り呉王の舟「餘皇」を取った。呉の公子光（閻閻のこと）は人々を前に「先王の船を失ったのは皆の罪である。皆の力で取戻したい」と説き、三人の配下を船の側に忍びこませる。三度「餘皇」と呼ぶ合図をきっかけに楚軍を破り、餘皇を取戻した。

出典は『春秋左氏伝』（昭公一七年）。猶、楚が戦勝し呉王の舟「餘皇」を手に入れたことは、『芸文類聚』（巻七一・舟）『太平御覧』（巻七六八・舟郡一）『円機活法』（巻一五・舟）『湖鑑類函』（巻三六八・舟）等他の類書にも見出せるのだが、呉が船を取戻したこと迄は言及しないものが多い。

85 良懷僭帝

菊池武政は九州を鎮護し威を振っていた。南朝の良懷（正しくは懷良）親王を閩西の王と称して明に書を遣わし隣好を通じたので、明では良懷が日本の真の王であると思った。

出典は『本朝蒙求』（巻上・76良懷僭皇）。そのもとは『明太祖実録』（第六八・九〇）『明史』（巻三三三・日本伝）あたりか。『本朝語園』（巻五・239懷良留明使於筑紫二）にも見える。猶、「良懷」と記すのは明側の記録で、正しくは「懷良」。

86 廬芳詐皇

後漢の建武十八年に代王廬芳が匈奴で死んだ。彼は自分が武帝の曾孫の劉文伯だと詐称していた。

と詐称していた。

出典は『十八史略』（巻三・東漢・光武帝）。猶、廬芳のことは『後漢書』（巻八九・南匈奴列伝第七九）に見え、その注に『東觀漢記』が引用されている。

87 義教望雷

將軍足利義教が永享四年（一四三二）富士山を見に下向。藤枝の鬼巖寺に至り、国主今川範政はこれを迎え、富士を觀望して詠歌のやりとりをした。

出典は『富士紀行』（飛鳥井雅世）『覽富士記』（堯孝）、或は『富士御覽日記』（宗長）あたりか。また、『今川家譜』でも言及され、後の史書『後鑑』（巻一五一・義教將軍記五下・永享四年九月一〇日）にも見えている。

88 隱公如棠

隱公五年の春、公が棠に行き漁を見ようとしたところ、臧僖伯が諫める。だが、公は国内を広く見たいと言い、遂に出かけ漁を見た。

出典は『春秋左氏伝』（隱公五年）。

89 蘇民縮茅

スサノオの命（武甕天神）が南海に行った時、日が暮れて民家に泊ろうとした。二軒のうちの弟の巨旦の方は裕福であつたが泊めてくれず、貧しい兄の蘇民の家に泊ることになり、粟飯のもてなしを受ける。スサノオは感謝し、八年後に訪れ、茅を縮めて輪に作り、「蘇民将来之子孫」の札を書き門や衣袂に懸けたら、災厄から免れるだろうと言が残したが、果たしてその通りだった。

出典は『本朝蒙求』（巻上・129蘇民縮茅）。この話は『釈日本紀』（巻七・述義三・神代上。『備後国風土記』所引）『榻嶋曉筆』（追加）『本朝神社考』（上之三・祇園。『簞簋内伝』所引）『二十二社註式』（祇園社）『雍州府志』（巻二・神社内・愛宕郡（蘇民将来の社）や『公事根源』『古事記裏書』など諸書に見える。

90 魏顆結草

魏顆は初め、病気の父に「自分の死後、わが愛妾は嫁に出せ」と命じられていたが、父は危篤になると「殉死させよ」と命じた。父の死後、魏顆は妾を嫁がせ言った。心の乱れていない時の父の命に従ったまでのこと、と。彼は後に秦との戦いで大力の士杜回を捕えた。それは彼の夢中に現われた先の妾の父が、草を結ぶ仕掛けを作りつまづきころばせて捕えたら良いと告げ、その通りにしたからだ。

出典は『蒙求』（154「魏類結草」）。この話は他に『春秋左氏伝』（宣公一五年七月）にあり、『群書類編故事』（巻一七・人類編〈死而結草〉）『日記故事大全』（巻五・徳報類〈従レ治嫁レ妾〉）『潜確居類書』（巻七〇・芸習六・遺言〈命嫁妾〉、巻七一・芸習七・墓〈殉妾〉）などの中国類書にも見える。

91 継体三相

武烈帝の崩後、大伴金村・巨勢男人・物部鹿人の三人は論議の上継体帝を即位させた。

出典は『日本書紀』（巻一七・継体天皇・即位前紀・元年）。他に『扶桑略記』（第三・継体天皇）『帝王編年記』（巻七・継体天皇。金村の名のみ見える）『日本紀略』（前編六・継体天皇。金村の名のみ見える）などにも記されている。『扶桑蒙求』（巻上・13継体三相）は本書に依る。

92 恵帝四皓

漢高祖は戚妃を寵愛し趙王如意が生まれた。妻の呂后は疎んじられ、その子も病弱だった為に、高祖は太子を廢して自分似の如意を立てようとした。そこで呂后は張良に助けを求め、帝の尊崇していた商山の四皓（東園公・綺里季・夏黄公・角里先生）を招き帝の思いをとどめさせた。

出典は『十八史略』（巻二・西漢・漢太祖高皇帝）。この話も有名で、勿論『史記』（巻五五・留侯世家第二五）『漢書』（巻四〇・張陳王周伝第一〇・張良伝）に見える他、『芸文類聚』（巻一六・儲宮）『初学記』（巻一〇・皇太子）『太平御覧』（巻一四七・太子二）『金壁故事』（巻一・高飛不レ作三商山鶴二）『測鑑類函』（巻五九・太子一）など諸書に見える。

93 義仲平章

源義仲は義方の次男。父が同族の義平に殺され、彼は二歳の時母と共に木曾の旧臣兼遠の下にのがれた。成長して勇豪・膂力あり、上皇の意を受け都の警護に当たっていた。猫間中納言光高の訪問の折、食事に平章の羹（あつもの）を出し、光高に賤しみ嫌悪され心を通わせることができなかった。

出典は『源平盛衰記』（巻二六・木曾謀反の事、巻三三・光隆卿木曾が許に向ふ附木曾院参頑なる事）、或は『平家物語』（巻六・義仲謀反、巻八・木曾猫間の対面）であろう。

94 王敦乾棗

王敦が舞陽公と結婚した時、廁に行くとき乾棗が漆の箱に入れてあった。その棗はもともと鼻をふさぐ為のものだが、彼は食用かと思ひ全部食べてしまった。また、戻ってくると、侍女が金の盥に水を入れ、瑠璃の椀に豆の粉（石饌として使われた）を盛って差出した。すると彼は粉を盥に入れ、乾飯と勘違いして飲んだので、侍女達は大笑いした。

出典は『世説新語』（紕漏・1話）。他に『北堂書鈔』（巻一三五・澡盤）『芸文類聚』（巻八四・瑠璃）『太平御覧』（巻三九一・笑、巻七一二・澡盤、巻七六〇・盥）『太平広記』（巻二六三）『事文類聚』（続集巻一〇・廁）などにも見える。

95 仲時野堂

鎌倉副元帥高時は、平仲時と時益を京都に遣わし六波羅を分治させた。南朝に後醍醐帝、北朝に光厳帝が立ち、平氏は北朝に加担し、源氏の尊氏・義貞・楠正成は南朝に与した。南軍の六波羅攻めに、仲時・時益は耐えきれず、帝と上皇を守り関東に赴こうとするが、時益は近江にて戦死した。仲時もやがて佐佐木時信が敵に降服したと聞き、野の草堂で自刃し、糟屋宗秋もこれに続いた。

出典は『太平記』（巻九・越後守仲時已下自害事）か。他に『増鏡』（第一七・月草の花）などにも記される。

96 田横海島

漢の高皇帝は田横を王か侯にしようと招く。田横は客分の二人と共に赴くが、途上の戸郷に着くと、彼は「天子におめにかかる前には身を洗い清めるべきだ」と使者に言い、客分には「自分は漢王の上に居たのに、今度仕える身となったのは恥辱。しかもその兄を烹殺した酈商と共に仕えるのは愧ぢずにおれぬ。漢王の招きは単にこの私の顔を見たいだけのこと。この首を斬り御覧に入れよ」と、自ら刎首して皇帝のもとへ届けさせた。高帝は賢者と称え涙し、二人の客分も自刎し、更に海中の島にいた田横の配下五百人も殉死した。

出典は『史記』（巻九四・田儻列伝第三四）。また、『漢書』（巻三三・魏豹田儻韓王信伝第三・田儻伝）もそれに近い記事である。猶、『十八史略』（巻二・西漢〈漢太祖高皇帝〉）『蒙求』（20「田横感歌」）の主意でも、挙げる故事としてはほぼ良いはずなのだが、敢て『史記』に立戻り、本文を詳細に記している。

97 良香索句

都良香は文才世に冠たる人。羅城門前で「氣霽風梳新柳髮」の句を得て対句を考えていたところ、急に楼上から声があつて、「氷消浪洗旧苔鬢」(『和漢朗詠集』巻上・早春13では鬢を鬚に作る)と続けられた。良香が菅原道真にその一聯を示すと、下句は鬼句のようだと言うので、良香は驚き事実を告げた。

出典は『十訓抄』(巻一〇・6都良香の三千世界眼前尽の詩、氣晴風梳新柳髮一の詩)か、『東斎随筆』(詩歌類・35話、或は『天文雜説』(巻二・都良香奇異事)あたりか。この話は他に『江談抄』(第四・20)『本朝神仙伝』(第二四・都良香)『撰集抄』(巻八・第三朱雀門鬼詩事)や『和漢朗詠集』の古注、更に『本朝神社考』(巻六・都良香)『本朝一人一首』(巻三・168)『史館老話』(4話)『本朝蒙求』(巻下・105良香動鬼)『本朝語園』(巻四・152良香動鬼神)など広く見えてよく知られ、『絵本故事談』(巻一・都良香)『大東世語』(巻二・文学)『扶桑蒙求』(巻中・良香一聯)『贈餘雜録』(巻二)『日本詩史』(巻一)『瓊矛餘滴』(巻中・良香感鬼)などにも受継がれている。猶、本文冒頭書き出し部分は、『元亨釈書』(巻一八・願維三・神仙(都良香))『本朝蒙求』と殆ど同じ。

98 文靖用事

虞文靖が宜黄にいた時のこと、楼で詩を吟じて「五更鼓角吹残雪」の句を得るや、谷川を隔てて一童兒が「角は吹けますが、鼓は吹けません」と言う。召し寄せようとしたが、既に所在がわからなかった。多分あれは詩鬼であろう。

出典は未詳。

99 空海仮名

空海は讃岐多度郡の人。沙門勤操に仕え、延暦乙酉(二四年)入唐(甲申の二三年入唐が正しい)し、大同元年帰朝。天長の初めに僧都となり、承和乙卯(二年835)、南紀の金剛峯寺で入定。延喜辛巳(二二年)弘法大師の諡を賜う。その知徳・靈驗・学才・書法は僧史に見え、世にいう以呂波の本朝仮名四十七文字は彼で作ったもので、四句の偈の諸行無常・是生滅法・生滅々已・寂滅為樂の意である。

出典未詳。空海の伝は「空海僧都伝」(真濟撰)「贈大僧正空海和上伝記」や『本朝神仙伝』(九・弘法大師)『日本高僧伝要文抄』(第一・弘法大師)『元亨釈書』(巻一・伝智一・金剛峯寺空海)『本朝高僧伝』(巻三・空海)といった比較的コンパクトな記述のものから、『大師御行状集記』『弘法大師御伝』『弘法大師行化記』『高野大師御伝』『弘法略頌抄』等かなりの資料を挙げつつ詳述するものもある。

また、伊呂波(仮名文字)を空海が作ったというのも、『釈日本紀』(巻一・開題)『河海抄』(巻二・梅枝)『簾中抄』『運歩色葉集』(跋文)『倭片仮名反切義解』(倭片仮名反切義解序)『高野日記』(釈頼阿撰)『日本書紀纂疏』(綱領)『枕芸日涉』(二・国音五十母字)『和字正濫鈔』(一・片仮名字体)『同文通考』(巻三・伊呂波)など諸書に見える。

100 程邈隸字

秦の時の程邈は獄吏であつたが、罪を得て雲陽に繋がれた時、獄中で大篆を作り、始皇帝に奏上して嘉され、御史となつて隸書体を定めた。

出典は『蒙求』(249「程邈隸書」)。他に『晋書』(巻三六・列伝第六・衛瓘子恒)『四体書勢』(衛恒撰)にも近い。『初学記』(巻二・文字)『測鑑類函』(巻一九五・文字二)にも見え、『事文類聚』(別集・巻一三・書法部「隸字之始」)『潜確居類書』(巻八一・芸習部一七・書法)は共に唐・張懷瓘の『書断』(巻上)を引用している。

101 俊寛鬼界

嘉応三年、俊寛・藤原成経・平康頼らの平氏討伐計画が露見し、三人とも鬼界島に遠流となつた。三年後中宮懷妊の恩赦の書がもたらされたが、そこに俊寛の名は無かつた。他の二人は舟に乗り、俊寛は号泣して別れを惜しみ、海水に腰までつかりつつ縋るも詮なく、後に悲憤にたえず島で客死した。

出典は『平家物語』(巻一・成親大将謀叛、巻二・三人鬼界が島に流さるる事、巻三・大赦有王島下り)か、『源平盛衰記』(巻四・鹿谷酒宴静憲御幸を止むる事、巻六・丹波少将召捕らる附謀叛人召捕らるる事、巻七・俊寛成経等鬼界島に移す事、巻九・宰相丹波少将を申し預る事他)といったところか。この逸話は謡曲「俊寛」(『謡曲百番』所収)などでもよく知られる。『扶桑蒙求』(巻上・38俊寛鬼界)は本書に依る。

102 蘇武胡地

蘇武は漢武帝の時に匈奴に使いして捕えられ、洞穴に入れられ食糧を絶たれたが、雪をかじり氈毛と共に飲み込み、数日しても死ななかつたので匈奴は神かと思つた。その後、北海に移されて羊の放牧をやらされ、野鼠や草の実で飢えをしのぎ、ほぼ十九年後の始元六年に都に戻つた。武帝廟に拝し、秩二千石、錢二百万、公田二頃、一区の宅を賜つた。

出典は『蒙求』（269「蘇武持節」）、他に『漢書』（巻五四・李広蘇建伝第二四・蘇武）も参看しているか。この故事は『十八史略』（巻二・西漢〈孝武皇帝〉〈孝昭皇帝〉）にも見え、中国類書の殆どに掲載される有名な故事である。『日記故事大全』（巻七・臣道類「不レ失漢節」）や『勸懲故事』（巻三・杖節牧羝）などは本書本文に比較的近いと言えよう。猶、本朝でも『今昔物語集』（巻一〇・漢武帝蘇武遣三胡塞一語第三〇）などに見えよく知られている。

103 親房職原

具平親王の子孫の北畠親房は後醍醐天皇に仕えたが、天下統一後は足利尊氏の反逆により、吉野に移って南朝を建て、南北各々で紀元を定めた。後継の後村上院は幼かったので親房が後見し、興国元年（一三四〇）二月下旬に『職原鈔』を撰し幼帝に教えた。

出典は未詳。林羅山が『職原鈔』の注に手を染め、息の春齋（鷲峰）も『職原抄聞書』『職原会通』『職原抄不審問答』などを記し、『源親房伝』（『鷲峰文集』巻五〇）を執筆していることも喚起される。猶、『扶桑蒙求』（巻上・40親房職原）は本書に依る。

104 劉昭官志

『後漢書』百官志に云うには、班固は百官公卿表を著して、漢が秦の官を承けていることを記しているが、その具体的な職分については記されていないので、劉昭が官簿を参照して職分を注した。

出典は『後漢書』（志第二四・百官一）か。猶、梁の劉昭には『後漢書集注』の著がある。

105 広世太素

和氣清麻呂の長子広世は博学多才で医術をよくし、『葉經太素』を撰し、その子の時雨が業を継ぎ大医となった。大己貴命と少名彦名命が力を合わせて療法や禁厭まじないの術を定めたというが、爾来吾が国には良医多く、広世は特段にすぐれた者である。

出典は『本朝医考』（巻上・大己貴命、巻中・和氣氏〈広世・時雨〉）か。後半「按」として引用するのは同書「大己貴命」の一節であるが、前半は必ずしも同書の当該人物の説明部分と一致しない。『本朝語園』（巻七・328広世顯二葉經太素）も『本朝医考』所引。猶、『扶桑蒙求』（巻下・24広世太素）は本書に依る。

106 思邈千金

唐の孫思邈は幼くして聖童と称され、太宗の時に諫議大夫を拝したが固辞して太白山に隠れ、道氣を学び、天文をさと、医業を究めた。『千金方』三〇巻、『脈經』一卷がある。

出典未詳。孫思邈のことは『新唐書』（巻一九六・列伝第一二一・隱逸・孫思邈）『旧唐書』（巻一九一・列伝第一四一・方伎・孫思邈）に見え、『淵鑑類函』（巻三三二・方術部・医二）にはその引用もあるが、本書本文とは少し隔たりがある。

107 江妓普賢

書写山の性空上人は仏を奉じ説經に精勤し、生身の普賢菩薩を拝せんことを誓願した。すると夢に摂州神崎の倡妓を見よとのお告げがあり、青樓に鼓して歌う妓を見る。目を閉じ観念すると普賢の清容が重なり浮かんで来、涙して感激したが、帰る時、妓が上人を追ってきて、この事を口外しないように言い、そのうちに亡くなった。

出典は『十訓抄』（第三・不レ可レ侮三人倫一事、15性空上人と普賢菩薩）か、『古事談』（第三・僧行、95性空上人発心并遊女拝事）、或は『東斎随筆』（仏法類・49）『三国伝記』（巻一一・第六・江口室之長者事）か。『本朝語園』（巻九・44性空拝二普賢一）にも見え、『私聚百因縁集』（巻四・4）『法華經鷲林拾葉鈔』（巻二四）『法華經直談抄』（巻一〇末・24）などでも知られ、謡曲「江口」に採込まれている。『扶桑蒙求』（巻下・21江妓普賢）は本書に依る。

108 馬郎観音

金沙灘のほとりの馬郎婦（馬氏の息子の婦）は観音の化身である。その出典はわからないが、遠州の美貌の婦人が若者達とねんごろになり数年後に死んだ。大暦年間に胡人の僧がやって来て、その墓に敬礼し、鎖骨菩薩だと言うので墓を開いてみると、果たして骨が鎖状くさりになっていたと『続玄怪録』に見える。馬郎観音その種類だろう。

出典に『伝燈録』と『続玄怪録』（『太平広記』巻一〇一・延州婦人）を挙げているが直接の典拠かどうか不明。猶、馬郎婦のことは『従容録』にも見えている。

109 中書前後

兼明親王（醍醐帝皇子）は左大臣に在ったものの、貞元二年に親王とされ中務卿に任じられた。博学多聞の人だが、藤原兼通には嫌われ、洛西に退隠して「菟裘

賦」を作し己の思いを述べた。具平親王(村上帝皇子)も中務卿に任じ、文才に優れ能書であった。後の人は兼明・具平の二人を前中書王・後中書王と称した。

出典は『史館名話』(70・71話)か。『本朝遷史』(巻上・源兼明)『本朝儒宗伝』(巻中・源兼明、具平王)『本朝語園』(巻四・189兼明、190伊勢(陟)奉「菟裘賦」、198具平真名)なども参考になったかも知れない。猶、前後中書王については後に『見聞談叢』(巻二・133前中書王・後中書王)にも言及があり、『扶桑蒙求』(巻上・54中書前後)は本書に依る。

110 相如古今

趙の藺相如は十五城と交換すべく璧を奉じて秦に入ったが、秦にその気がなかったので、秦王に対し怒髪冠を衝き璧を砕こうとまでするも、璧を全うして秦から戻った。趙王は彼を上卿とし刎頸の交わりを結んだ。司馬相如(長卿)の「子虚賦」を読んだ漢武帝は同時代人でないことを嘆じた(実は同時代人で、この後に会っている)。長卿は藺相如の為人を慕って字を相如としたのであった。

出典は『史記』(巻八一・廉頗藺相如列伝第二二)、巻一一七・司馬相如列伝第五七)か。司馬相如のことは『漢書』(巻五七・司馬相如伝第二七)や『文選』(慶安五年和刻本、「子虚賦」の作者名下注記)とも関わる可能性もあるだろうし、中国類書にもよく見える故事なのでそれを参看したかも知れない。

111 閑院藤波

和銅三年に藤原不比等が大和の平城に興福寺を建てた。皇極元年に蘇我入鹿は山背大兄王の子弟を殺し、自宅を「宮闕」、子を「王子」と称す。中大兄王子・中臣鎌足は共に愁え、入鹿を誅殺し、以後藤原氏は繁栄する。弘仁四年冬嗣が南円堂を建てたところ、一老翁が「補陀落や南の岸に堂を建て今ぞ栄えむ北の藤波」と詠歌する。それは春日明神の化現であった。

出典未詳。入鹿誅殺の経緯は『日本書紀』(皇極天皇二年一月、三年一月、四年六月など)『扶桑略記』(第四・皇極天皇)等諸書に見え、弘仁四年に冬嗣が興福寺の南円堂を建てたことは『帝王編年記』(巻一一・嵯峨天皇)『南都七大寺巡礼記』(興福寺)や『興福寺縁起』にも見え、「補陀落や」の和歌は『新古今集』(二八五四、春日大明神)に所収されるところとなった。猶、『扶桑蒙求』(巻中・54閑院藤波)は本書に依る。

112 召公棠陰

周の武王が殷の紂王を滅し、召公を北燕に封じた。陝以西は召公が、陝以東は周公が治めた。召公は『君奭』篇を作り周公を不快に思っていたが、周公が伊尹・伊陟ら賢臣の輔佐が殷の治世を安定させていたことを説いて、召公を喜ばせた。召公が郷邑を巡視した時、甘棠の木の下で訴訟をさばきすぐれた政事を行った。その死後も人々はその木を伐らずに召公を偲び、「甘棠」の詠を作った。

出典は『史記』(巻三四・燕召公世家第四)。もともとこの故事そのものは有名で、『詩経』(国風召南・「甘棠」)でも知られ、『文選』の注にもしばしば引かれ、『太平御覧』(巻六三九・聴訟、巻九五八・甘棠)や『君臣故事』(句解巻二・聴訟類・「棠下聴訟」)等の類書にも見える。宋・桂万榮『棠陰比事』(江戸期によく読まれた)もこの故事をふまえた書名。

113 崇峻斬猪

崇峻天皇は、威を誇り実権を恣にする蘇我馬子を憎んでいた。山で捕獲された猪が献上されるや、それを指さし、馬子をこの猪の首を断つようにできたら、と語る。帝の寵愛を失っていた大伴小手子はその言葉を耳にして馬子に密告し、天皇は馬子に弑殺された。

出典は『本朝蒙求』(巻上・35崇峻斬猪)。もとは『日本書紀』(巻二一・崇峻天皇五年一〇月、一一月)に見え、『扶桑略記』(第三・崇峻天皇)『先代旧事本紀』(巻九・崇峻天神)『日本紀略』(前編七・崇峻天皇五年一〇月、一一月)『水鏡』(巻中・崇峻天皇)にも引かれる。猶、『扶桑蒙求』(巻上・35崇峻斬猪)は『本朝蒙求』と本書を受ける。

114 晋霊囃葵

晋の霊公は趙盾を招き暗殺しようとしたが、盾配下の提弥明が察知して彼を連れ帰ろうとする。霊公は大犬をけしかけるが、提弥明がこれを叩殺。盾は「人を大切に扱わず、犬を使うとは」と怒り剣を振り闘った。後に趙穿が桃園で霊公を殺したので、亡命途上の趙宣子は国境を越えずに引返してくる。董狐は趙盾が君を殺したと記録したが、宣子がそれは違ふと咎める。すると逆に董狐に責任を追及された。

出典は『春秋左氏伝』(宣公二年秋九月)。

115 瀧守護桜

南殿の桜は紫宸殿の東南の角にあり、大内草創の時の木である。貞観年間に枯れ

朽ちたものの、根からわずかに萌芽あり。これを坂上瀧守に保護させて枝葉・花の繁茂するに至った。村上朝に火事で焼け、後に栽え替えられてもいる。

出典は『本朝蒙求』（巻上・102瀧守護桜）。この故事については『禁秘鈔』（巻上）『河海抄』（巻四・第五花宴）の記事が先行する。また、南殿の桜のことは『江談抄』（第一・25紫宸殿南庭橋桜両樹事）『古事談』（第六・亭宅諸道・1話）『東斎随筆』（草木類二・12話）『古今著聞集』（巻一九・草木第二九・4南殿の桜の事）『古今要覧稿』（草木・紫宸殿左近桜）等にも見えるが、いずれも坂上瀧守には言及していない。猶、『絵本故事談』（巻七・瀧守）や『見聞談叢』（巻三・左近桜右近橋）『扶桑蒙求』（巻上・80瀧守護桜）は『本朝蒙求』や本書を受けるもの。

116 夢得題桃

劉夢得「再遊三玄都觀」絶句の引に次のように見える。貞元二十一年の頃玄都觀に桃花はなかったが、地方に十年いて都に戻ってきたら、人々が云うに、道士が仙桃を植えたそうで、觀に満ち溢れる程である。そこで「看花君子詩」に「紫陌紅塵弘面来」云々と作った。後にまた左遷されて十四年経てこの觀を訪れたら、一本の桃花なくただ兎葵・燕麦が春風に揺れるだけ。再び詩を作り「百畝庭中半是苔」云々と詠じた。

出典は『事文類聚』（後集卷三一・桃花）か。この話の内容については『劉禹錫集』（卷二四・「再遊三玄都觀」絶句并引）、或は『劉夢得文集』（卷四）の別集にも勿論載っており、『太平広記』（卷四九八・劉禹錫）には『本事詩』（事感第二）を引用して見え、『唐詩紀事』（卷三九・劉禹錫）『唐才子伝』（卷五・劉禹錫）にも採挙げられ、『円機活法』（卷二〇・桃）『淵鑑類函』（卷三九九・桃二）『塵史』所引」といった類書にも収められる。

117 菅氏文章

菅原道真是野見宿祢の後。土師古人・道長の時に菅原姓を許さる。博学多聞の清公、家業を継いだ是善は清和帝侍読となり、道真はその子。幼くして優れ、才能は父祖に勝り、詩文を成す。渤海使からは白楽天に似た詩と評された。讃岐守をへて累進して右大臣となる。大宰権帥に左遷され、延喜三年配所で薨じ、その歌集を『菅家御集』、その詩文を『菅家文章』といい、大宰府時代の詩集は『菅家後集』という。

出典は『本朝神社考』（上之二・北野）で、その抄出。『扶桑蒙求』（巻中・13菅氏文章）は本書に依る。

118 屈原離騷

屈原は楚に仕え三閭大夫になった。だが、その才能に嫉妬した靳尚に陥れられ江南に流謫になった。思いを訴えるあてもなく作ったのが「離騷経」で、その愁苦を述べ、正道を説き、諷諫する作。しかし、結局は顧られず汨羅に身を投じた。

とにかくよく知られた故事で諸書に見えるのだが、直接的な出典は和刻本『文選』（慶安五年刊本『六臣注文選』卷三三・上）の「離騷経」作者名「屈原」下の張銑注と思われる。『絵本故事談』（巻四・屈原）も出典を『史記』（巻八四・屈原賈生列伝第二四）と記すが、『蒙求』（309「屈原沢畔」、310「漁父江浜」）をアレンジしたものである。

119 武文怒浪

元弘の乱で、後醍醐帝は隠岐へ、尊良親王は土佐に配流。秦武文は親王の命を受け、都に上り龍妃藤氏を迎えにゆく。尼崎迄連れて来た時、舟の風待ちをしていた筑紫の武士松浦五郎が妃に欲情し、百餘の兵を動員して奪わんとす。武文孤軍奮闘するも遂に奪われ、武文は忿怒自裁して海に沈む。五郎が舟中の妃に挑むや鳴門の暴風に弄浪される。龍神が妃を欲しての災いとされ、妃を小艇にて放つと淡路の武島に漂着した。その後妃は苦辛を嘗め、朝敵滅亡した都で後醍醐が重祚した時、親王も妃も旧邸に会することとなり、武文の忠死に感じ入った。

出典は『太平記』（巻一八・春宮還御事付一宮御息所事）か。『本朝蒙求』（巻下・47築賊奪妃）も同話であるが、表現はかなり異なる。『扶桑蒙求』（巻中・86武文怒浪）は本書に依る。

120 子胥憤濤

呉王は伍子胥に死を賜い、屍を皮袋に入れ川に流した。白い馬と車に乗って潮頭に立つののある人が目にした。毎年仲秋十五日に潮波が大きく激しくおし寄せ、杭州人は旗をかけた鼓を打ってそれを迎える。

出典は『円機活法』（巻四・海潮・「白馬素車」）。同じく『臨安志』を引く『群書類編故事』（巻三・子胥揚濤）『事文類聚』（前集卷一五・潮・「子胥揚濤」）もある。この故事は『芸文類聚』（巻九・濤）『論衡』所引や『呉越春秋』（巻五）『日記故事大全』（巻七・臣道類・「不レ忍二呉亡一」）などにも見える。

121 珍彦授簪

神武帝が船戦で東征し、速吸の港に来た時、国の神の珍彦の釣りをしているの

に遇い、水路の案内をさせるべく椎篙しいさおの末を授け、御舟に入れて特に椎根津彦の名を与えた。これは倭直部の始祖である。宇佐に行くと、菟狭津彦・菟狭津媛が宮を造って饗宴し、媛を天種子命に妻合わせた。命は中臣氏の遠祖である。その後天皇は筑紫の岡水門おかみなと、安芸の埃宮あかみやにいらした。

出典は『日本書紀』(巻二・神武天皇即位前紀甲寅年)、『扶桑蒙求』(巻中・41珍彦授篙)は本書の抄出。

122 呂望釣璜

太公望呂尚の先祖は諸侯の長官となり、禹を助けて治水の功があり、呂・申や枝庶に封ぜられ、姜氏を称した。が、子孫は庶人で、彼は封地により呂尚と称していたものの困窮して老い、魚釣で周西伯(文王)に見出された。西伯が璜を占つてもらったら「龍・鰲・虎・熊でもない、霸王の輔佐が得られる」と出、果たして渭水の北で呂公と出会った。語り合い喜んで「太公(亡父)から賢人が現われ周を栄えさせてくれる」と言われたが、あなたこそ待ち望んでいた人だ、ということ。「太公望」と称して師と仰いだ。別に呂尚が磻溪での釣りで玉璜を手に入れ、それには「姫受レ命、呂佐レ之、報在レ齊」と刻されていたとも、魚の腹中より玉璜を入手したと記すものもある。

出典は『史記』(巻三二・齊太公世家第二)か。有名な呂望非熊の故事だが『蒙求』ではカバーできない。また、末尾の磻溪の故事は『史記』には見えないが、『芸文類聚』(巻八三・玉)『初学記』(巻二二・漁)『瑯玉集』(巻一四・祥瑞)『事類賦』(巻九・玉)『太平御覧』(巻六七・谿、巻八四・周文王、等)『事文類聚』(前集巻三七・釣者)等オーソドックスな類書に見えている(『尚書中候』『尚書大伝』所引)。

123 仲王忘鈴

履中帝の太子の時、妃に羽田矢宿祢の娘黒媛が立てられることになり、納采も終えた。婚儀の吉日を告げに行った住吉仲皇子は太子を騙り、媛を奸し、己の手鈴を忘れて帰った。翌日夜、太子が媛の家を訪れ、床頭の鈴を怪しみ媛に問い、事の真相を知った。

出典は『日本書紀』(巻二二・履中天皇即位前紀)。他に『日本紀略』(前篇五・履中天皇)『本朝語園』(巻八・379仲皇子奸三黒媛)などにも見える。猶、『扶桑蒙求』(巻中・12仲王忘鈴)は本書に依る。

124 韓寿窃香

韓寿は美男子である。賈充は彼を下僚に任じ集会のたびに彼を家に呼んだ。その娘は彼を一目見て惚れ、想いこがれて歌を口ずさんだりしたので、下女が寿に告げた。彼は美女と聞いて下女に仲をとりもたせ、家人に知られぬように関係を持った。充は韓寿の異香に気がつく。それは外国産で、帝から寿と陳騫のみに下賜されたものであったから、自分の娘と寿の関係を知り、結局は娘を寿に妻合わせたのであった。

出典は『世説新語』(或潮第三五・5話)か。但し、『群書類編故事』(巻九・賈女窃香)やこれを受けると思われる『事文類聚』(後集巻一五・淫婦、(賈女窃)もかなり本文に近い。標題も同じ『蒙求』(423「韓寿窃香」)の本文を用いなかったのは何故かわからないが、この故事は他に『晋書』(巻四〇・列伝第一〇賈充付賈謐)『太平御覧』(巻二九二・吟)等にも見える。

125 顯宗曲水

顯宗帝は地方暮らしをされ、百姓の憂苦を御覧になって心を傷められ、即位されるや徳を布き恵みを施して、貧民や孀婦を哀れまれた。即位元年三月上巳の日に始めて曲水宴を催し、翌二年にも行われ、公卿大夫・臣・連らを集め、群臣達は万歳を称した。

出典は『本朝蒙求』(巻中・71顯宗曲水)。もともとは『日本書紀』(巻一五・顯宗天皇即位前紀、元年、二年、三年の三月上巳、四月庚辰)に見える。猶、本朝における曲水宴の起源については、『年中行事秘抄』(三月)や『公事根源』(三月曲水宴)などでも言及されており、『日本紀略』(前篇五・顯宗天皇)にも『書紀』の引用がある。また、『扶桑蒙求』(巻上・4顯宗曲水)は『本朝蒙求』や本書の影響下にある。

126 周公泛觴

晋の武帝が摯虞に三日曲水の意義と起源について尋ねると、後漢の時三月初に生まれた徐肇の三人娘が三月に亡くなり、世間は奇怪に思い、水辺で身を清め、杯を浮かべるようになったと言う。一方、東晉は、周公が洛陽に都した時、流水に杯を浮かべたことに依り、また秦の昭王が三日に河辺で飲酒して金人から水心剣を授けられ、諸侯の覇者となると予言されたと言う。武帝は後者の意見を喜んだ。

出典は『円機活法』(巻三・上巳・(流杯曲水))。もともこの故事は『続齊諧記』に見え、歳時部・三月三日(或は上巳)の部立を有する殆どの類書に所収され

る記事（『芸文類聚』巻四、『初学記』巻四、『白氏六帖』巻一、『太平御覽』巻三〇、『幼学指南抄』巻三、『源鑑類函』巻一八、『書言故事』巻一〇、等）。他に『晋書』（巻五一・列伝第二一・束皙）『群書類編故事』（巻二・曲水流觴）にも見え、和刻本『六臣注文選』（巻四六・顔延年「三月三日曲水詩序」）の李善注にも引用される。

127 高家青麦

西征した新田義貞は、田の麦を刈ったり民室を犯したりしてはならぬと定めたが、配下の小山田高家は青麦を刈り軍営に入った。高家が部下の飢えた兵卒の為に罪を忘れて行ったことを知り、その田主と高家に褒美を与えた。高家はその恩義に感じて義貞の身代わりとなり死んだ。

出典は『本朝蒙求』（巻下・89高家刈麦）。もともとは『太平記』（巻一六・小山田太郎高家刈二青麦一事）に依り、後には『絵本故事談』（巻五・小山田高家）『扶桑蒙求』（巻中・24高家青麦）などに影響を与えることとなった。

128 靈輓騎桑

趙宣子が首山で狩をし桑の木蔭で休んだ時、靈輓なる者が飢えているのを目にした。聞けば三日食っていないとのこと。彼が食物の半分を残したので聞くと、家を出て遊学三年、母が気になり故郷も近いので持ち帰りたいと言う。そこで別に竹籠弁当や肉を用意して与えた。その後靈輓は趙の敵方の伏兵となり趙を討つはずだったが、恩に報いる為宣子を庇い危難から救った。

出典は『事文類聚』（別集巻三二・施恩）か、『蒙求』（153「靈輓扶輪」）であろう。もとは『左伝』（宣公二年九月）に出るもので、『芸文類聚』（巻八八・桑）『太平御覧』（巻九五五・桑）『源鑑類函』（巻四一四・桑）等にも引かれる。

129 成範禱桜

通憲の子の藤原成範は風流閑雅で中納言に至った人。桜花を愛し、吉野の桜の頃には風景を夢想した。住居を囲むように桜を植え、毎年春花の芬芳を楽しみ酔吟した。花の時の数日に過ぎないことを憂え、泰山府君に延寿を祈ったところ、二十一日を経ても衰えないようになり、当時の人は彼を桜町中納言と呼んだ。

出典は『本朝蒙求』（巻下・15成範桜町）。もとは『源平盛衰記』（巻二・清盛息女の事）や『平家物語』（巻一・三台上祿）あたりに見えていること。後の『絵本故事談』（巻七・成範）『扶桑蒙求』（巻上・61成範禱桜）は『本朝蒙求』や本書を継ぐもので、『瓊予餘滴』（巻上・成範桜町）『日本蒙求初編』（巻上・成範禱桜）と

明治に入ってから採擷げられている故事。

130 放翁化梅

陸游の字は務観、放翁と号した。宋に仕え秘書監となり、梅花を愛して「聞説くならく梅花曉風に拆く」云々と詠じている。

出典は陸游「梅花絶句六首」のうちの其三（七八歳の嘉泰三年（一二〇二）の作。『劍南詩稿』の本文と若干異同があるので、詩話書類からの引用かも知れない）。

131 高倉宸楓

高倉天皇は仁孝にして優れた才智の持主で、十歳で霜葉を好み内園に仮山を築かれ楓を植えた。後に林を成し政務の餘暇に楽しんだが、ある夜暴風が葉を散らし、錦繡が一面敷き展べられたように見えた。天皇は翌日その残紅の美を愛でようと楽しみにしていたが、興趣を知らぬ庭師や衛士達が落葉を集め酒を煖めたりして燃してしまった。天皇は白居易の「林間暖酒焼紅葉」（『朗詠』巻上・秋興221）の詩句を吟じ、憂鬱されることなく、彼らの雅趣を嘉された。

出典は『平家物語』（巻六・紅葉の巻）。『源平盛衰記』（巻二五・此の君賢聖並紅葉の山葵宿祢附鄭仁基の女の事）にも前掲白詩所引の逸話はあるが、登場人物も筋立ても異なる。猶、高倉院の学才は「古今著聞集」（巻四・23高倉院秀句の事、24高倉院中殿にて作文の事）等によると相当なものであったようである。『扶桑蒙求』（巻上・26高倉宸楓）は本書に依る。

132 景公宮槐

齊の景公は槐えいの木を大切に守り、傷つけたり犯したりした者には刑死を与える事としていた。傷槐衍が酔払って槐を傷つけ、捕え罰せられようとしたところ、衍の娘は恐れて晏子のところに行き、わが君は木を愛して人を賤しんでいると言われよう、と説いた。

出典は『列女伝』（巻六・齊傷槐女）か。この故事は他に『芸文類聚』（巻八八・槐）『太平御覧』（巻九五四・槐）『事文類聚』（後集巻二三・槐）『源鑑類函』（巻四一三・槐三）等にも見え、すべて『晏子春秋』の引用である。

133 定家九品

藤原定家は九品の和歌を詠じた。
出典未詳。九品和歌と言えば藤原公任『和歌九品』を念頭に置くのが一般であらう。

う。『扶桑蒙求』(巻中・63定家九品)は本書に依る。

134 王粲七哀

王粲は漢時の戦乱を哀れみ「七哀詩」を作った。

出典は和刻本『文選』(巻一一)の「登樓賦」作者「王仲宣」注記と、同書(巻二三)の曹植「七哀詩」題下の呂向注を合わせる。

135 良秀笑焚

絵師良秀は己の家の火事に憂えることもなく、傍に立ち幾度もうなづき笑った。

或る人が「お前は火事が嬉しいのか」と問うと、「長年不動尊の図を描いてきたが上手く火災が書けなかった。今この目で真実を見ることができたのだ。生業に打込めば家財など自と盈ちるもの、焼失を惜しいとは思わぬ」と答えた。

出典は『本朝蒙求』(巻下・32良秀笑焚)。もとは『十訓抄』(第六・35絵師仏師良秀のよぢり不動)や『宇治拾遺物語』(巻三・6絵師良秀家の焼くるを見て悦ぶこと)に見える有名な説話で、『本朝語園』(巻五・263良秀之不動)『本朝画史』(上巻)などにも受継がれている。

136 柳元賀災

柳宗元に「賀三進士王參元失火一書」がある。茅坤によると、晋公の藏宝台が焼けた時、晏子ひとり束帛して賀したという。柳の文に「祝融・回祿(共に火の神の名)が君を助けたのだ」とあった。当時の人々は王參元のところには賄賂で財産が積むが如くあると言われていたので、焼亡で潔白だと言えるようになったのは良かったね、ということである。

出典は『唐宋八大家文鈔』(茅坤の批評付)。猶、『事文類聚』(統集巻一八・火災、〈祝融陰相〉〈火焚藏室〉)も関連するところがある。

137 円臣燔宅

安康帝は眉輪王に父の仇として殺された。雄略天皇は即位後にその事実を知り、眉輪王・坂合黒彦皇子を問い詰める。恐れた二人は円大臣家に匿れるものの、官軍に囲まれる。大臣は二王の為に叩頭して許しを乞うたが許されず、火を放たれ、燔られて死んだ。

出典は『日本書紀』(巻一四・雄略天皇即位前紀)、『日本紀略』(前篇五・雄略天皇)にも見える。『扶桑蒙求』(巻中・87円臣燔宅)は本書に依る。

138 仲由結纓

仲由(字は子路)は粗野で勇力を好み気が強く、孔子に暴力をふるおうとしたが、教えたとされて弟子となった。衛の靈公の寵姫南子との間に過ちを犯し出奔した蕢贖は孔悝を脅して加担させ、靈公の後継となった自分の子の出公を襲撃して衛から追い出し、即位して莊公となった。その孔悝に仕えていたのが子路で、主人を蕢贖のもとから救出しようとしたが叶わず、遂に蕢贖に殺された。子路はその直前に冠の纓を断ち切られるが、「君子は死んでも冠はぬがない」と纓を結び直して死んだ。出典は『史記』(巻六七・仲尼弟子列伝第七)。

139 淑望詞林

延喜帝は紀貫之に命じて『古今和歌集』を撰進させた。貫之「仮名序」と共に、淑望に「真名序」を作らせ、和歌は心を根とし、詞を花とするものと説いている。

出典は『古今和歌集』の真名序。『扶桑蒙求』(巻下・90淑望詞林)は本書に依る。

140 長卿詩城

劉長卿は若い時嵩山に住み、後に鄱陽に移った。開元二十一年に科挙に及第し随州の刺史に終った。瀟陵の谷あいに別荘があった。彼は秦系と詩を贈答し合った。権徳輿は二人について、長卿は自分を「五言詩の長城」と言っているが、秦系は「偏師」(小編成の軍)でこれを攻めたてている、と評した。

出典は『唐才子伝』(巻二・38劉長卿、巻三・69秦系)か。権徳輿の論評については『古今合璧事類備要』(前集巻四四・詩律)『事文類聚』(別集巻九・詩上・五言長城)『円機活法』(巻一一・詩・五言長城)『十七史蒙求』(巻一四・秦攻長城)『新唐書』(巻一九六・列伝第一二二隱逸・秦系)などに(断片なら『郡齋讀書志』巻四上のようなものにも)見える。

141 釈阿九旬

藤原俊成は和歌の才を称せられ、保元二(実文治三)年に『千載和歌集』を撰し、寛元(実安元)二年出家して釈阿と号した。建仁三年には詔ありて和歌所にて九十の賀を賜わるといふ未曾有の榮に預り、元久元年九十一歳で没した。

出典は『二十一代集才子伝』(散位・皇太后宮大夫俊成)か。但し、文中には前掲の他にも誤りがあり、「中納言信忠」は「権中納言」、「叙三正二位」は「叙三三位」が正しい。『扶桑蒙求』(巻中・68釈阿九旬)は本書に依る。

142 桓榮五更

永平二年、後漢の明帝は養老の礼を行い、李躬を三老とし、桓榮を五更とした。三老は東面し、五更は南面する。帝自らもてなした後、榮や弟子を引連れ、堂上で諸儒に經典を執らせ質疑が行われた。見聞きした者は億万あったという。

出典は『十八史略』（巻三・東漢・孝明皇帝）。猶、関連記事は『後漢書』（巻二・顕宗孝明帝紀第二・永平二年、巻三七・桓榮丁鴻列伝第二七桓榮伝）にも見える。

143 義満花亭

源（足利）義満は義詮の子で、祖父尊氏は清和帝の後胤で、頼朝と同祖。鎌倉北条氏滅後、尊氏は後醍醐帝に寵され、関東八州を領して征夷大將軍となった。都で諸国を統制し治世三十年で薨じ、義詮も継ぐこと十年で没したので幼い義満が位を嗣ぎ、細川頼之が輔佐した。彼は才智あり威權父祖に過ぎ、皇室に擬する政事を行った。永和四年花亭に移り室町殿と号して多くの名花を植え、その奢沢よりは挙げる迄もない。征夷大將軍・太政大臣・従一位・準三宮に至り、応永十五年に五十一歳で没した。

出典未詳。猶、室町の花の御所については『貞丈雜記』（巻一四・家作）等諸書に見え、『扶桑蒙求』（巻下・15義満花亭）は本書に依る。

144 亜夫柳營

前漢の文帝の時、匈奴が侵入し、將軍周亜夫は命ぜられて細柳に、劉礼は霸上に、徐厲は棘門に駐屯防備した。帝が陣中見舞いに霸上や棘門を訪れると、大將以下送迎に出たが、細柳では將軍の命がなければ兵は天子の詔をも聞き入れず、詔が周將軍より伝えられてはじめて門が開かれた。帝は周こそ真の將軍で、先の二營など兎戯の類だと語った。

出典は『十八史略』（巻二・西漢・孝文皇帝）。勿論『史記』（巻五七・絳侯周勃世家第二七）や『漢書』（巻四〇・張陳王周伝第一〇・周勃伝付亜夫伝）にも見える。また、『芸文類聚』（巻五九・將帥）『太平御覽』（巻二三七・総叙將軍）等の類書にも見える。

145 博雅双吹

源博雅三位は音楽に通じていた。月明りに乗じ朱雀門あたりを徘徊し、一晚中笛を吹いていた。すると、冠服姿の人が現われ同じように笛を吹く。余りの音色の素

晴らしさに、相対して吹き合わせたが、一言も話したことはなかった。笛を取替えて吹くなどしてそれを手元に留めた。その後博雅が亡せ、その笛を帝は献上させ樂人に吹かせたが、本来の音色が出ない。久しくして浄蔵が吹くと本来の音色が出たので、朱雀門で吹かせたところ、楼上で「すぐれた樂器だ」と大声で嘆息する者がいた。浄蔵が宮中に還って報告すると、帝はこれは鬼の笛だと言ひ、葉二と命名した。

出典は『十訓抄』（第一〇・可レ庶幾才能芸業・博雅三位の笛）か。猶、『東斎随筆』（音楽類一・9）『楊鳴晩筆』（第一八・樂器・1青葉二）『本朝語園』（巻七・362葉二）などの記事も近い。この「葉二」に関する記事は他に『江談抄』（第三・50葉二為三高名笛一事）『教訓抄』（巻七・舞曲源物語）『統教訓抄』（巻一一上）『糸竹口伝』『体源抄』（巻二上）などにも見える。

146 桓伊三弄

桓伊（字は野王）が蔡邕の柯亭の笛を吹いていた時、王徽之は上洛の途中で、清溪に舟を留めていた。伊の顔は知らないが、彼が岸辺を通りかかると、ある人が「あれが桓野王です」と言う。そこで徽之は「笛が上手いと聞くが一曲所望したい」と申込み、伊も下車してこれに答え、胡床で三度奏し、立去ったが、二人は一言も言葉を交さなかった。

出典は『円機活法』（巻一七・笛・〈扱レ床三弄〉）。もとは『世説新語』（任誕第二三・49話）で、『晋書』（巻八一・列伝第五一・桓宣附伝桓伊）にも見える。勿論有名な故事なので、『芸文類聚』（巻四四・笛）『太平御覽』（巻五八〇・笛）等にも所収される。

147 道長狗功

藤原道長は法成寺を創建する。毎日進行状況を見に門に至り、履物をはこうとした時、愛する白犬が近付き、彼の朝服をくわえて頻りにその場に留めようとする。不審に思い安倍晴明に占わせると「呪で道長を害そうとする者がいる、道を掘ったら証拠が出るはず」というのでやってみると、黄色のこよりを十字にからげた一双の土器が出てきた。開けて見ると朱で文字が記されている。晴明は「この術はわが家の秘術だ」（他に知る者はいないはず）と驚き、試しに式神（陰陽師が使う精霊）を使い調べようと、鳥形の紙を空に投げると忽ちに白鷺と化して去り、六条坊門・万里小路の小竹のある家に至った。搜索させると晴明の弟子の道満法師がいて、左府顕光の密命でやったと白状した。道長は法に依らずきつく戒め、道満を播州に

放逐した。

出典は『十訓抄』（第七・可レ専二思慮一事・21御堂入道殿の白犬道摩法師の厭術）か、『古事談』（第六・亭宅諸道・64犬ノ告ケニヨリ晴明路中ノ厭術ヲ見顕ハス事）。ただ、『宇治拾遺物語』（巻一四・10御堂関白の御犬晴明等奇特の事）もほぼ同じで、それを引用書に挙げる『本朝語園』（巻七・341晴明捕二道満一）にも近く、これも有力か。猶、『扶桑蒙求』（巻中・34道長狗功）は本書に依る。

148 周象虎夢

狩を好む周象が汾陽令となった時、夢中に一匹の幼い虎が迫るとみた。驚き目覚めると病にかかっていた。僧海寧が周の家に通りかかり、隣家の者に「この家には妖気がある。長引くと助けられまい」と言われたので周に告げた。彼が僧に御禪をしてもらうと、床下に虎の声がし、周は不覚にも床下に落ち氣を失うも、僧が水を吹いてくれたのでもとに戻った。

出典未詳。

149 長清拆桑

藤原長清は儒学を学び和歌をよくした。『万葉集』や二十一代集以外にも和歌の世界は広く深いものであるから、その道に研鑽する為にも千万の歌詞を編纂することが必要と、題を分類し三十六巻にまとめた。歌材を求むるならこの書を頼って欲しいと思いつつ、書名をえずにいたところ、夢中の白衣の翁（大江匡房）の啓示（『扶桑集』とすべし）に依り、師の冷泉為相の助言（『扶桑』の両字の偏旁を除く）をえて『夫木和歌鈔』とした。

出典は『夫木和歌鈔』（刊本）の跋文。『扶桑蒙求』（巻上・62長清拆桑）は本書に依る。

150 揚雄吐鳳

楊（揚が一般か）雄は学を好むが、吃音だったので激しい話し方はできなかった。山の南に住し、漢の成帝の時に推薦されて仕えた。甘泉賦・河東賦・校獵賦・長楊賦を作る。甘泉賦を作った時には夢中に白鳳を吐いたという。

出典は『漢書』（巻八七上・揚雄伝第五七上）か。「甘泉賦」を作り夢中に白鳳を吐いた故事は『事文類聚』（別集巻一一・賦）『円機活法』（巻一一・文章賦）にも見えるが、『事類賦』（巻一八・鳳）や『太平御覧』（巻九一五・鳳）は『西京雜記』（巻二）を引いて、『太玄経』を著して白鳳を吐いたことになっている。

151 忠常窮穴

仁田忠常は清和源氏、桃園親王貞純の末裔である。建仁三年に源頼家が富士山麓に狩した折、洞窟を発見したので忠常に探検させた。報告に依れば、洞穴の口は狭く引き返せないのに進むも難渋した。中は真暗で道もわからず、へとへとに疲れ、従者達も灯火をとり進むが、水流に足をひたしたり、蝙蝠が飛び交い先を遮ったりする。前に大きな川があり、逆巻いて漲っていた処を渡り、足場を失ったと思った時、火の光の怪異を目にした。四人の従者は死に、忠常は剣を河中に投じて生還した。

出典は『本朝蒙求』（巻中・119忠常人穴）。この忠常洞窟探検譚は他に『吾妻鏡』（建仁三年六月三、四日）『本朝神社考』（中之四・富士山）『日本古今人物史』（巻四・勇士・6仁田忠常伝）『本朝語園』（巻一・15伊東崎洞并富士之人穴）『絵本故事談』（巻五・新田忠常）『広益俗説弁』（巻二三・士庶・仁田忠常富士の狩に野猪をとどむる説附同人富士之人穴に入って地獄をめぐる説）などに見えている。『扶桑蒙求』（巻下・94忠常窮穴）は本書に依る。

152 毛萇尋洞

洞庭に二穴あり。闔閭は令威に洞を探索させ、灯火を乗り昼夜七十日進ませても窮められなかった。報告し云うに、初め入口は狭く屈んで入ると、数里程で高さ二丈程の石室に至る。天井から水が滴り、石床・枕硯があり、石の机上には素書三巻があったので持ち帰り、闔閭に献上した。孔子に尋ねると、それは夏禹の書で神仙のことが記されているという。再び別の穴に入り二十日して戻って来て云うに、前回とは違って上に風水や波濤を聞くばかりだったと言い、また、変な虫や石燕・蝙蝠などがいて前進困難だったと言う。毛萇は毛公とも言い、今の洞庭には毛公の宅がある。

出典には冒頭に『庭山記』とあるが、某書からの孫引きの可能性もあり、未詳。また、『分類故事要語』（巻一）に引く『呉地記』にやや近い内容でもあり、『太平御覧』（巻五四・穴）引用の『婁地記』にも一部近いところがある。

153 伊尹慟哭

藤原伊尹には挙賢・義孝の子がいた。母は恵子女王で、二人とも容姿良く才もあった。共に少将に任じられ、前少将・後少将と称されたが、不幸にも同日（天延二年九月一六日）に病没し、父母は悲哭した。

出典は『大鏡』（巻中・太政大臣伊尹）。但し、本書に「公及夫人、吞レ声悲哭」と

あるが、二人の子は実際には伊尹没後に物故しているので、伊尹が現世で悲しむことはありえない。猶、義孝卒去の記事は『日本往生極樂記』（34少将義孝）『扶桑略記』『法華驗記』（巻下・103右近中将藤原義孝）『今昔物語集』（巻一五・左近少将藤原義孝朝臣往生語第四二）『普通唱導集』（巻下）『元亨釈書』（巻一七・願雑二・王臣・羽林次将藤義孝）にも見え、『百人一首一夕話』（巻四・藤原義孝）にも受継がれている。『扶桑蒙求』（巻中・22伊尹慟哭）は本書に依る。

154 孟郊悲悼

孟郊は嵩山に隠栖し貧居苦吟する生活を送り、五十歳の時進士となり、鄭餘慶の下で参謀をつとめ没した。張籍が「貞曜先生」の諡号をおくった。韓愈の文（孟東野失子序）に依ると、孟郊は三子を設けたがいずれも数日のうちに亡くし、老いて子のないことを悲しんだ。

出典は『新唐書』（巻一七六・列伝第一〇一・孟郊）と『韓昌黎集』（巻四・「孟東野失子并序」）か。

155 仲子罹疾

藤原仲子は兼綱女で後円融帝母であり、梅町殿・崇賢皇后と称す。病臥して医薬の効なく命も危かった時、諸卿は神社への奉幣や泰山府君への祈禱を行おうとしたが、仲子は国の冗費で何の益もなきこと、これも天命であると述べて留め、九十三歳で崩じた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・134仲子止禱）。もとは『倭論語』（巻七・貴女部・従二位仲子）に見える記述。『扶桑蒙求』（巻下・4仲子罹疾）は本書に依る。

156 長孫止禱

文徳長孫皇后は九成宮で病になったが、折しも柴紹らによる急変事態が起こり、帝が甲冑を身につけると后も病をおして従おうとされたので諫止された。太子が大赦を發し災いを払おうとされたが、生死は天命である、悪行をなさなかったから福あれば寿命も延びるだろう、赦令は国の大事であり、自分の為に天下の法を乱してはならぬと語った。

出典は『新唐書』（巻七六列伝第一・后妃上・文徳長孫皇后）か。『旧唐書』（巻五一列伝第一・后妃上・太宗文徳皇后長孫氏）にもその伝は見えている。

157 師賢衰衣

平高時は朝廷の討幕の動きを知り、都に使者をやり、天皇と皇太子を遠隔地に遷そうと考えたが、天皇は都を脱出し笠置に留住了。この時藤原師賢が天皇の衣裳（衰衣）をまとい身代わりとなって叡山に登り軍を聚めた。幕府の兵はこれを聞き叡山を攻め、天皇は笠置に軍兵を召し集めることができた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・74師賢繡裳）。もとは『太平記』（巻二・師賢登山事付唐崎浜合戦）に見えるもので、他に『増鏡』（巻下・第一五・むら時雨）にも関連記事がある。『扶桑蒙求』（巻上・68師賢繡裳）は『本朝蒙求』と本書を受ける。

158 紀信左轟

漢の紀信は（漢王に仕え）將軍となった。項羽が（漢王の居る）滎陽を囲みさし迫った状況下にあった時、彼は漢王の身代わりとなり、夜に王の車（左轟とは車の左側に喪の垂れ旗を付けていたのをいう）に乗り城外に出て注目をひき、その隙に漢王を脱出させた。が、紀信は項羽に焼き殺された。

出典は『蒙求』（390「紀信詐帝」）。勿論この故事は『漢書』（巻一上・高帝紀第一上）にも見え、『源平盛衰記』（巻二〇・高綱姓名を賜ふ附紀信高祖の名を仮る事）『太平記』（巻二・主上臨幸依非実事一山門変儀事付紀信事。かなり詳述し随所に引用される）でも知られる餘りに有名な忠臣献身譚。

159 兼良驕矜

一条兼良は博学多才で著書多く、神・仏・歌道に通じていた。七十二歳で出家して覚恵、後成恩寺と号した。自負して菅原道真公の再生と言っていた。文明十三年に八十歳で薨じた。

出典は『本朝蒙求』（巻下・46兼良博厚）。猶、兼良が菅丞相（道真）に勝る点が三つあるとして張合う話は『本朝一人一首』（巻七・346藤原兼良）『鷲峰先生林学士文集』（巻七九・哀悼七・西風涙露下）『本朝語園』（巻四・210兼良三勝）などにも見える。『扶桑蒙求』（巻上・65兼良驕矜）は本書に依る。

160 審言蹇傲

杜審言は才を誇るあまり傲慢で人に疾にくまれた。蘇味道が天官侍郎の時、彼は選試に預り、それが終わるや「味道はきつと死ぬ」と言った。人がわけを問うと、「俺の文を見て己の才を恥ぢ死ぬのさ」と。また、自分の文才は屈原や宋玉、書の才は王羲之の北面に匹敵すると言っていた。

出典は『旧唐書』（巻一九〇・列伝一四〇上・文苑上）『新唐書』（巻二〇一・文芸伝上・杜審言）のいずれか、或は『唐才子伝』（巻一・7杜審言）あたりか、猶未詳。但し蘇味道と関わる前掲逸話は『太平広記』（巻二六二・輕薄・杜審言）や『南北史統世説』『潜確居類書』（巻八一・芸習部一七・文章）などにも見える。

161 藤太勢多

依藤太秀郷は逆臣平将門を討ち、鎮守府將軍を拜し、関東に栄えた。彼が近江の瀬田橋を渡ると橋上に恐しい大蛇がいたが、恐れ怯むことなく跨ぎ、蛇も驚かなかった。これを見た人が「この橋の下に二千年いるが君のような剛勇の者はなかった。我が為にあれを退治してくれ」というので承諾すると、湖水の朱樓紫閣で接待を受けた。やがて比良峯の百足馬蛇が襲うも、これを射て退治する。先に依頼した人は実は龍宮世界の人で、彼に絹や俵・鐘などの褒美の品を与え、子孫はきつと將軍になるだろうと言う。目をつむると彼はもとの橋の側に立っていた。不思議なことに彼がその絹を裁つと長くなり、その俵に米を入れるとすぐ一杯になる。そこで依藤太と号し、鐘は三井寺に寄進した。その鐘を山徒（叡山）は無動寺岩下に捨て毀したが、小蛇がその鐘を修復したという。

出典は『本朝神社考』（下之五・依藤太）。この話は『太平記』（巻一五・三井寺合戦並当時撞鐘付依藤太事）、御伽草紙の『依藤太物語』などにも見える。『本朝蒙求』（巻中・40秀郷射蛇）に比べ本書はかなり長文で直接のつながりはないか。『扶桑蒙求』（巻中・15太勢多）は本書に依る。

162 漁客武陵

晋の太元中に武陵の人が溪谷に入り道に迷って、美しい桃花咲く地に至り、山の穴を見つけて進んでゆくと、忽然と広く平和な田園の村落に出、人々に歓待される。その人の話では秦の世の乱を避けてこの地に来、外の世界に出たことがないと言、漢・魏・晋の国さえ知らない。数日留まって去る帰途処々に目印を付けたものの、再び尋ねることはできなかった。

出典は陶潜『桃花源記』で、ほぼそのままの引用。

163 高綱渡河

佐佐木高綱は、石橋の合戦後しばしば頼朝が襲われるのを防いだ。頼朝は日本を領有できたら半分を彼に与えたと約束し、馬を下賜したりした。彼は宇治での先陣争いでも名高い。文治の初め頃、頼朝から七州守護職を授けられるが、約束が違う

と、出家隠遁したのは惜しまれる。建仁の頃に子の重綱らと共に叡山攻略に参加。息子のもとを訪れ、武器が体に合わないのを見て、戦死を免れないと涕泣し、果たしてその通りとなった。

出典は『日本古今人物史』（巻四・勇士・4佐佐木高綱伝）か。猶、高綱の活躍は『平家物語』『源平盛衰記』にも描かれよく知られている。

164 王霸踏氷

光武帝は従う王霸に「多くの者は逃亡したがお前だけはわが下に留まった。疾風勁草を知ると言うが頑張ってくれ」と言う。敵の王郎軍が背後に迫り、彼は先行して溱沔河迄来たところ、河は流れ舟なくしては渡れぬと知る。だが、彼は軍兵がパニックに陥るのを恐れ、河が氷結していたと帝に奏上した。実際全軍がやってくると氷結し、渡河の後で融け、王霸の機智は天祐の如く人々を救った。

出典は『蒙求』（494「王霸氷合」）。勿論『後漢書』（巻二〇・鮑期王霸祭遵列伝第一〇）にも見え、要略は『事文類聚』（前集卷五・氷・「溱沔氷合」）『測鑑類書』（巻三一・氷・「河流漸」）といった類書にも見える。

165 鷲尾釈褐

平氏の一谷攻めに源義経は難渋する。一計を案じ、丹波路にまわり鴨越の谷を攻めることにしたが、根雪が消えておらず道筋がわからない。そこで管仲の老馬の智に倣うべく弁慶が連れて来たのが鷲尾武久なる獵師だが、餘りに老い長けていたので、十八歳の息子熊王が代って道案内をつとめる。義経は鷲尾三郎義久の名を与えて仕えさせ、困難を克服して勝利し平氏を滅ぼした。頼朝は讒言を信じ義経を責め、義経は難を避け身分を匿して北陸をへて東北に逃れるが、衣川城にて頼朝軍に攻められて自尽し、義久もそれに従った。

出典は『平家物語』（巻九・三草山（鷲の尾案内者の事））か『源平盛衰記』（巻三六・鷲尾一谷案内者の事）であろう。但し、上記書をもとにする武林伝あたりの可能性もある。『扶桑蒙求』（巻下・19鷲尾釈褐）は本書に依る。

166 灌嬰販繪

絹商人の灌嬰は中涓で漢の高祖の下に戦い、垓下で敗れた項羽を追撃し、部下五人と共にこれを斬った。この功で爵を賜い、潁陰侯に封ぜられ、文帝の時に丞相となった。

出典は『蒙求』（568「灌嬰販繪」）。もとは『史記』（巻九五・樊鄴滕灌列伝第

三五）『漢書』（巻四一・樊鄴滕灌傳斬周伝第一一）に見える。

167 暁月詠風

歌人暁月なる者は狂詞に巧みで妙を尽くした。蟻風（風は蟲の俗字）の百詠が世に行われている。昔の滑稽をこととする人で、或る人は藤原俊成の孫というのが定かでない。

出典は『本朝蒙求』（巻下・113 暁月蟻風）。もとは『碧山日録』（長祿三年九月一日）に依るだろう。暁月は藤原為守のことで、『狂歌百人一首』『北窓瑣談』（後編巻四・15）『松屋筆記』（巻九・1）『一言一話』（巻三・7）などにも暁月のことが見えている。『扶桑蒙求』（巻中・67 暁月百詠）は本書に依る。

168 欧陽憎蠅

欧陽脩は尹師魯と師友の関係であった。古文を執筆するその才は天下に冠たるものがあつた。蘇内翰には韓愈の後三百年にして欧陽ありと記され、『五代史記』を撰して『春秋』の意を汲み、醉翁・六一居士などと号した。かつて「憎」蒼蠅一賦を作し、その物を害すること、姦人・邪佞の君徳を敗るにも似ると論じた。出典は恐らく『古文真宝後集諺解大成』（賦類）。その「秋声賦」の作者名「欧陽永叔」下の注記に依り伝を先ず記し、同書所収「憎」蒼蠅一賦「題下注の記事を追加して本書本文は成立しているか。猶、「憎」蒼蠅一賦」は『事文類聚』（後集巻四九・蠅）にも所収。

169 頼光四王

源頼光は武勇で知られ、鎮守府將軍に至つた。伊吹山の凶賊（酒顛童子）を誅し、市原野の狡童（鬼童丸）を殺し、その他の奮戦ぶりも言い伝えられている。その下に源綱・平貞道・平季武・平公時の四雄士がいて四天王と言われた。持国・増長・広目・多聞という仏法を護る四天王に擬したのである。

出典は『日本古今人物史』（巻一・8 源頼光）。本文の「在二口碑」迄は上記の文をそのまま襲用。それ以下は特に出典は要しないと思うが、因みに御伽草子の「酒顛童子」（伊吹山系）や『古今著聞集』（巻九・武勇第一二・源頼光鬼同丸を誅する事）にも四天王の名は出てくる。

170 漢高二傑

漢の高祖は即位した時に酒宴を設け、自分が天下を手にし項羽が失つたのは何故

かと問うた。高起・王陵が答え、「陛下は城を攻め落したら攻略者に与えたが、項羽は功ある者を殺し賢者を疑い、人に利を与えなかったからだ」と言うと、高祖は「作戦立案の張良、国家安撫と食糧を確保した蕭何、軍兵運用巧者の韓信といった三人の傑物を用いることができたことだ」と言い、項羽は范増一人さえ十分に用いられなかったと説いた。

出典は『十八史略』（巻二・西漢・漢太祖高皇帝）。他に『史記』（巻八・高祖本紀第八）『漢書』（巻一下・高帝紀第一下）にも見える。

171 経信多芸

円融上皇の大井河御幸では詩歌管絃の三船を泛べた。その時に公任は和歌の船に乗り秀歌を献じたが、詩船に乗れば良かったと後悔した。また、白河帝の大井河行幸では、源経信が管絃の舟に乗り、演奏した上に詩歌を献じたので、その多芸に人々は帰服した。嘉保九（元が正しい）年六月に大宰帥となり八十二歳で薨じた。

出典は『本朝蒙求』（巻中・79 経信多芸）。この三船譚は古くからよく知られ、『袋草紙』（雑談・92・93 話）『十訓抄』（第一〇・可レ庶三幾才能芸業一事）『東斎随筆』（興遊類・76・78 話）『古今著聞集』（巻五・和歌第六・168 御堂関白大井川遊覧の時四条大納言公任和歌の船に乗る事）『本朝一人一首』（巻六・262 源経信）『史館茗話』（83 話）『本朝語園』（巻三・108 御堂関白三詩歌船）、109 経信乗三船一）の他、『大東世語』（巻二・文学・21 話）『本朝世説』（巻下・品藻・73 話、巧芸・97 話）『扶桑蒙求』（巻中・4 経信三舟。珍しく『桑華蒙求』からの抄出ではない）『百人一首一夕話』（巻五・大納言公任、巻六・大納言経信）『皇都午睡』（初編下の巻）などにも見える。

172 世南五絶

虞世南は隋に仕え秘書郎となり、次いで唐に仕え秘書監となった。太宗文武皇帝は世南は一人で五絶を兼ねると称した。それは博学・德行・書翰・詞藻・忠直を指し、その中の一つでも有すれば名臣に足るものである。

出典は未詳。勿論五絶の逸話そのものは『新唐書』（巻一〇二・列伝二七・虞世南）『旧唐書』（巻七二・列伝二二・虞世南）『唐詩紀事』（巻四・虞世南）『新語園』（巻四・41 虞世南五善）『国史異纂』『国朝雜事』所引などに見える。

173 頼業学庸

清原頼業はいつも『礼記』を読み、大学・中庸の二篇はきつと後世の達理の人な

ら抽出して一書とするだろうと思った。四書集註が中国から渡来した時、程顥・程頤兄弟が学庸を抜き、論孟と合わせて四書とした。頼業の思った通りであった。

出典は『本朝蒙求』(巻下・19頼業学庸)。この『大学』『中庸』標出説は『康富記』(享徳三年二月一八日)あたりに発するのであろうか。『本朝儒宗伝』(巻下・清原頼業)『本朝語園』(巻四・209頼業標二出大学中庸)などにも見えている。

174 茂叔図説

周惇頤、字は茂叔、濂溪先生と号した。黄山谷が言うに、茂叔は人品がとても高く、光風霽月のようだと。若い頃から自由に生き、『太極図』『通書』などを著し、千年の儒学の伝統を継いだ。

出典未詳。猶、茂叔の風貌為人については『純正蒙求』(巻中・茂叔光霽)『伊洛渊源録』や『続蒙求』(巻一・20濂溪霽月)『書言故事』(巻五・身体説類・顔貌類〔光風霽月〕)『古文真宝後集諺解大成』(説類・「愛蓮説」の作者名下に付された注記)『性理大全』(『太極図説』『通書』を所収)等に見えている。

175 心願雨泥

佐佐木心願は鎌倉幕府の宗尊王に仕えていた。ある日近臣と蹴鞠をすることにだったが、折しも雨の後でぬかるみがあった。心願は木のけづりくず敷台分を献じ地に敷いた。人々は常日頃の備えの良さに感心した。

出典は『徒然草』(一七七段)。もっともその注釈書(例えば林羅山『野槌』、青木宗胡『鉄槌』、加藤磐斎『徒然草抄』、浅香山井『徒然草諸抄大成』、北村季吟『徒然草文段抄』といった類)と関わる可能性もある。『扶桑蒙求』(巻中・85心願雨泥)は本書に依る。

176 陶侃序雪

陶侃は晋の成帝の時に八州の軍事の都督となり、長沙公に封ぜられ、七十六歳で薨じた。大司馬を贈られ、諡を桓という。かつて船造った時の余りの木屑や竹片をとっておいた。元日の朝会の時、大雪は晴れたが役所の前はぬかるみがあった。そこで先の木屑を地に敷いた。

出典は『晋書』(巻六六・列伝第三六・陶侃)か。陶侃の木屑の話は『世説新語』(政事第三・16話)『十八史略』(巻四・東晋・肅宗明皇帝・顯宗成皇帝)『十七史蒙求』(巻七・竹頭木屑)『事文類聚』(前集巻四・雪)『田機活法』(巻二・雪)『淵鑑類函』(巻一七・元正三・〔木屑〕)など諸書に見える。

177 菟道反魚

応神帝の崩後、菟道稚郎子^{うつのわかしら}は兄の鸕鷀^{うづみすな}皇子に位を譲り、これを輔佐しようとしたが、鸕鷀は受け入れず、各々が譲り合ったので空位が続き三年たった。ある海人が鮮魚を献じたが、菟道・鸕鷀双方が譲り合い、魚は腐ってしまった。郎子は兄の心を変えることができないと知り、自ら死を選び、兄はそれを知って哭し、菟道の山上に葬った。

出典は『本朝蒙求』(巻上・92菟道讓位)からの抄出か。もとは『日本書紀』(巻一〇・応神天皇、巻一一・仁徳天皇即位前紀)に見え、『日本紀略』(前篇四・応神天皇、前篇五・仁徳天皇)にも抄出されている。

178 伯夷采薇

孤竹君には伯夷・叔斉の二子があり、父は叔斉を後継にしたいと思っていた。父の死後、叔が伯に譲ろうとすると、伯は拒否して逃亡し、叔もまた逃げたので国人はその間の子を立てて国君とした。その後二人が西伯昌(周文王)を尋ねると、子の武王が父の位牌を抱えたまま殷紂王を討とうとしていた。そこで父を葬ってもいないのに戦をするなど孝とは言えぬし、臣下の身で君主を弑殺するなど仁とは言えぬ、と諫言した。やがて武王が殷を平定し、人々は周を仰ぐようになったが、伯夷・叔斉は恥ぢて周に仕えず、首陽山に隠れ、薇を採って食べ、いよいよ餓死せんとする時「登三彼西山一兮」云々の歌を作った。

出典は『史記』(巻六一・伯夷列伝第一)。この採薇の故事はよく知られていて、『十八史略』(巻一・周(周武王))『続蒙求』(巻一・15伯夷採薇)のみならず諸書に見える。

179 伊実挽袴

藤原伊実^{ふじのわかつみ}は鳥養中納言と号する。少壮の頃より学業につとめず、競馬や相撲を嗜むばかりだったから父はきつく戒めた。力士に某なる者がおり、頭から相手の腹に突込み倒し百戦無敗だったので人は「腹くじり」と呼んだ。父は伊実に対し、その力士に勝ったなら相撲をやめろとは言わぬ、もし負けたらもう相撲はするな、と約束させて争うこととなった。力士は伊実^{いみ}に頭をつけたが、彼は力士のまわしの結び目をとって強く引張ったところ、痛くてたまらず力士は地に倒れた。父は驚きがかかりし、力士は行方をくらました。

出典は『古今著聞集』(巻一〇・相撲強力第一五・9中納言伊実相撲腹くじりに勝つ事)。猶、『続本朝通鑑』(巻五八・二条天皇中・永暦元年九月)の伊実伝の記

事も『著聞集』を基に漢文化しているので、本書と比較するのも一興であろう。

180 令文圧衣

宋令文は書に巧みで豊かな詩文の才があり、勇力もあったので三絶と号した。五本指で唐臼の杵をとって壁に四十字の詩を書いた。大学生の時、手で講堂の柱を起こし、学生仲間を柱下に押しつけ、酒席を設けることで許してやった。

出典は『朝野僉載』（巻一〇・宋令文）か、それを引用する『太平広記』（巻一九一・宋令文）か。猶、宋令文は宋之問の父で、三絶のことは『新唐書』（巻二〇二・列伝第一二七・文芸中・宋之問）『旧唐書』（巻一九〇中・列伝第一四〇・文苑中・宋之問）にわずかに触れられているが、本書の話は見えない。

181 橘氏答戯

小式部内侍は橘道貞と式部江氏（和泉式部）の娘である。母が藤原保昌に再嫁して丹後に居た時、宮中の歌会に預った。中納言定頼がその部屋の前を通る時「丹後からの手紙はあったかな」と揶揄したところ、「大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」と即吟して定頼を驚かせた。

出典は『十訓抄』（第三・不_レ可_レ悔三人倫一事、1小式部内侍の大江山の歌）か『古今著聞集』（巻五・和歌第六・41小式部内侍が大江山の歌の事）、もしくは『百人一首』（その注釈書も含む）あたりであろう。勿論、その前に『袋草紙』（巻一・13置_二白紙_一作法）や『俊頼髓脳』（15歌と故事）等にも見えているので特定は難しいか。他に『絵本故事談』（巻六・小式部内侍）『百人一首一夕話』（巻五・小式部内侍）『瓊矛餘滴』（巻下・式部摺袂）にも継承されている。『扶桑蒙求』（巻中・56和泉答歌）は本書に依る。

182 謝女解困

謝道韞は晋の王凝之の妻で、聡明で弁の立つ人であった。凝之の弟猷之が賓客と談論してやり込められそうになった時、下女に「あなたの為に相手を論破してあげましょう」と告げさせ、衝立で隔てて、猷之の議論を引き継ぎ相手をやり込めた。

出典は『蒙求』（136「謝女解困」）。もとは『晋書』（巻九六・列伝第六六・列女・王凝之妻謝氏）に見え、『太平広記』（巻二七一・謝道韞）『独異志』所引『事文類聚』（後集卷八・人倫部・嫂叔・為_二小郎_一解_レ困）『潜確居類書』（巻五九・人倫部一二・女子附）他にも見える。

183 禅尼繕障

松下禅尼は秋田城介景盛の娘で平時氏に嫁し時頼を生む。その為人は貞秀清俊で晩年の節操はいよいよ堅固であった。ある日自ら障子を繕っていると、訪れた兄の義景が「何もそなたがそんな事をせぬとも、障子張の者にさせれば良いではないか」と言う。そこで彼女は「破れは小さい時に繕っておけば大きくはならない。今日は時頼が来るので、そのことを悟らしめたいと思ひこうしているのです」と答えた。

出典は『徒然草』（一八四段。注釈書類も含む）か。この逸話は他に『本朝女鑑』（巻二・賢明下・松下禅尼）『本朝列女伝』（巻三・孺人伝・松下禅尼）『倭論語』（巻七・貴女部・松下禅尼）『本朝語園』（巻四・217松下禅尼繕_二障子_一）等にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・183禅尼繕障）は本書に依る。

184 孟母断機

墓地近くに住むと幼い孟子が墓遊びをした。母は住むにふさわしくないと市場の側に移った。すると今度は商人ごっこを始めたのでここもふさわしくないと学校のそばに移った。すると学校ごっこで恭しい仕草を身につけたのでここそ住むべき処と母は思った。孟子が学校を休んで家に戻ると母は学問の進み具合を尋ねた。変わらぬと答えると、母は刀で織物を断つて、学問を途中でやめるのは布をこんな具合に断つと同じだ、と言った。孟子は懼れ朝夕に学問に精出し名儒となった。

出典は『蒙求』（134「軻親断機」）。この孟母三遷と断機の話は餘りにも有名で、例えば『列女伝』（巻一・母儀・鄒孟軻母）『事文類聚』（後集卷六・人倫部・教子（母教）・三徙軻隣）『書言故事大全』（巻一・父母類・三徙軻隣）『君臣故事』（句解卷二・勤学類・以_レ刀断_レ機）『潜確居類書』（巻五九・人倫部一二・父母祖父母部・三遷、断機）や『語園』（巻上・13三度隣ヲ遷ス事、14孟子ノ母機ヲ断事）などにも見える。

185 源融塩竈

源融は嵯峨帝の子で左大臣・儀同三司に至った。遊楽を好み動植物を愛し、都の六条に河原院を建てた。陸奥の塩釜の景観を模して築山や池を造り、湖水を浪速の浦から運ばせ、塩作りの煙を上げさせた。また、西嵯峨野に棲霞観を造つたりもした。七十三歳で没し、後に紀貫之が河原院の荒廃ぶりを見、「君まさで煙たえにし」の悲歌を詠じた。

出典は『本朝蒙求』（巻中・69源融乗輦）と『本朝語園』（巻八・401融霊）あたり

か。但し、この融の故事は『伊勢物語』(八一段)以来古くから知られ、『今昔物語集』(巻二七・河原院に融左大臣の霊を宇多院見給ひし語第二)『宇治拾遺物語』(巻二二・15河原院融の霊住む事)などの説話でも採挙げられ、『顕注密勘』(巻一六)『花鳥餘情』(巻一〇・松風。棲霞観にも言及する)他の注釈書にも広く見え、『二十一代集才子伝』『百人一首一夕話』(巻二・河原左大臣。等の近世書にも相承されている。また、貫之のことは『古今集』(哀傷・八五二)『今昔物語集』(巻二四・河原院に歌よみども来て和歌を読みし語第四六)などに見えてよく知られ、『本朝語園』や『一夕話』などにも引かれている。『扶桑蒙求』(巻上・57源融塩竈)は本書に依る。

186 徳裕平泉

唐の李徳裕は宝暦中に浙西觀察使となり、太和中に劍南に移った。蜀川に籌邊楼を建て、平泉莊を置き、周回十里に台榭を百餘り設け、様々な花木怪石を配した。会昌の初めに宰相となり、諸藩鎮を平らげて、太尉となり衛國公に封ぜられた。

出典未詳。『旧唐書』(巻一七四・列伝第一二四・李徳裕)『新唐書』(巻一八〇・列伝第一〇五・李徳裕)には平泉莊のこと記さない。『事文類聚』(続集巻九・居処部・園池)には李徳裕「平泉山居戒子孫一記」や『劇談録』の平泉莊の記事が引かれている。また本書後半に『賈氏談録』からの引用が見えるが、これは恐らく『潜確居類書』(巻四七・区宇四二・莊、平泉莊)からの引用ではないかと思われる。

187 道風筆病

小野道風は延長七年に醍醐天皇に召され、賢聖図像障子の姓名を書き、康保三年に七十一歳で卒した。晩年手がふるえ、字勢も震掉したが、氣韻は愛賞すべきものがあつた。世に伝えるところでは、道風が空海の額書を批判したという。

出典については、前半が『本朝蒙求』(巻中・4道風書廂)を利用し、後半は『古今著聞集』(巻七・能書第八・2大内の門の額の事)に依ろう。勿論賢聖障子のことは『古今著聞集』(巻一一・画図第一六・1紫宸殿の賢聖障子并に清涼殿等の障子画の事)や『日本紀略』(延長六年六月二二日、七年九月条)『太平記』(巻一二・大内裏造宮付北野天神事)『考古図譜』(巻四・計部・賢聖御障子)『本朝語園』(巻五之上・247道風震筆)『絵本故事談』(巻六・道風。前半は『本朝蒙求』に依り、後半は柳にとびつく蛙の逸話を載せる)等に見え、『扶桑蒙求』(巻中・53道風筆病)は本書に依る。

188 張旭草顛

張旭は草書にすぐれ、大醉しては叫び走って筆を下し、頭を墨でぬらして書いた。酔いから醒めると自分でもすばらしいと思った。世間では「張顛」と彼を呼び、その草書はびっくりした蛇が草むらに入り、鳥が林から飛び出すようだと言われる。出典は『事文類聚』(別集巻一三・書法部・草書。張旭のことは他に『新唐書』(巻二〇二・列伝第一二七・文芸中・張旭)『宣和書譜』(巻一八・草書六)『論書牘語』(第一〇章・草書)等に見え。

189 直実先鋒

熊谷直実は平治の乱の時は源義平に属し、郁芳門を守った十六騎のうちの一人である。後に頼朝に属し、常州佐竹の役や一谷の合戦で平山秀重と先陣を争って軍功多い。敦盛を斬り武名を知られた人だが、後に出家して蓮生と称し洛東黒谷の寺の源空に師事した。

出典は『日本古今人物史』(巻四・勇士・5熊谷直実伝)、『絵本故事談』(巻五・熊谷直実)は本書に依るようだ。

190 祖逖著鞭

祖逖は英気のある人で、晋元帝の時予州刺史となった。長江を渡る時に楫で舟べりを叩いて「中原の賊を肅清せず江を渡るくらいなら、この大江の流れの如く去って返らぬつもりだ」と誓い河南を平定し、河を渡り冀朔を一掃した。妖星が現われたのを見て、逖は「私の為であろう」と言い、果たして没した。劉琨は逖が用いられると聞き、親類や馴染みの友人達に手紙を送って「いつも祖逖が私より先に事を成してしまっているのではないかと恐れている」と言っている。

出典は『晋書』(巻六一・列伝第三一・祖逖、劉琨)か。一部『蒙求』(530「祖逖誓江」)『十八史略』(巻四・東晋(中宗元皇帝))『絵本故事談』(巻一・祖逖(晋書))などと重なる部分もある。

191 道灌江城

太田持資(道灌)は上杉の家臣で江戸城を草創した。村菴・肅菴の文に依ると城内には静勝軒、西に含雪斎や東に泊船亭などがあり、万里集九を招いて銘や詩文を作らせて、数千巻の蔵書を静勝軒に収めた。医方・兵書・史伝・小説及び日本の歌書や代々の撰集、家々の私記等である。道灌は暇をみて詩歌の雅宴を催し賓友を集めた。又、天満宮を江戸城の北に作り菅公を信敬した。父の名を道真というが、当

時の人は真灌と称した。当時は上杉の両家（山内の顕定と扇谷の定正）が争っており、彼は定正を助け尽力したが、顕定方の陰謀で定正に殺される。死に臨み「定正は家を亡ぼす兆^{きざし}なり」と言い、果たして彼の没後、定正の權威は振わなかった。

出典は『日本古今人物史』（巻二・名家部・7太田道灌伝）。猶、『本朝蒙求』（巻上・11持資起宇）も少し類似するところがある。『扶桑蒙求』（巻上・84道灌江城）は本書に依る。猶、万里集九（『梅花無尽蔵』第六）に「静勝軒銘詩并序」がある。

192 王維輞川

王維は字を摩詰といい開元年間に尚書左（右の誤り）丞となった。弟の王縉も蜀州刺史となったが、兄の五短・弟の五長を挙げ説いたりしている。輞川に別荘があり、裴迪と共に遊び、詩を賦して楽しんだ。蘇東坡が言った。「摩詰の詩中には絵があり、その描いた絵の中には詩がある」と。安祿山の乱で捕われ、凝碧池に宴した詩に「万戸傷心生二野煙」云々の詩があるが、賊平定後にその詩により宥された。

出典は未詳。王維の伝は『旧唐書』（巻一九〇下・列伝第一四〇下・文苑・王維）『新唐書』（巻二〇二・列伝第二二七・文芸中・王維）に見える。輞川荘のことは、上記の他に『事文類聚』（統集巻六・居処部・第宅）『唐才子伝』（巻二・36王維）『潜確居類書』（巻六四・方外部四・游覧・輞川別墅）『箋注唐詩選』（巻一・「送別」詩の王維注）等にも見える。蘇東坡の批評（『東坡題跋』巻五・「書二摩詰藍田煙風図」）は『詩人玉屑』（巻一五・王維・詩中有画画中有詩）に、凝碧池賦詩については『唐詩紀事』（巻一六・王維）などにも見えている。

193 持統臨朝

持統天皇は鸕野讃良皇女といい天智帝の二女である。斉明帝三年に天武帝に嫁ぎ、草壁皇子を生み、天武に従い吉野に入った。天武帝の元年六月に東国に難を避け、軍兵を整え、七月に美濃の軍将と共に大友皇子を誅し、二年に皇后に立てられ天皇を輔佐した。天武崩ずるや政を代行し、後に皇太子に譲位した。

出典は『日本書紀』（巻三〇・持統天皇・称制前記、朱鳥元年九月、持統天皇一年八月）。『扶桑蒙求』（巻上・10持統臨朝）は本書に依る。

194 宣仁垂簾

神宗が崩じ太子が即位したものの、まだ一〇歳だったので太皇太后が政務をとった。熙寧年間のこと、太后は泣いて神宗の為に言った、王安石の変法はよくない、

と。天下の厭苦を知り、兵馬や保馬をやめ、東西の物資場をやめ、地価や息銭・免行錢をやめ、提挙・保甲・錢量・巡教等の官を廃した。元祐八年に崩じ、「女中の堯舜」と称えられた。

出典は『十八史略』（巻七・宋・哲宗皇帝）

195 新田詠賢

新田部皇子は勝間の池に遊び興趣にたえなかった。涼氣に乗じて夕方帰り、愛妾に語った。「池の蓮はかくわしく美しい、帰るのを忘れる程だった」と。妾は信じず「勝間田の池は我知る蓮無し然言う君がひげなきがごと」（『万葉集』三八三五）と詠んだ。澄（澄が正しい）観法師が云うに、勝間田池にはもともと蓮はないので、親王は立派な鬢の持主だが、それを鬢無しと言うようなことで、嘘なのだと言った。出典は『本朝語園』（巻三・和歌・91勝間田池蓮）。もとは『袋草紙』（雑談・75）に「万葉集云」として見えるのだが、「澄、観法師」を「澄、観法師」とする『本朝語園』を承けると考える。但し、ひげを本書のように鬢と記するのは聊か抵抗を覚える。『扶桑蒙求』（巻中・29新田詠賢）は本書に依る。

196 退之誤髻

世間の人が韓愈を描くと小顔で美しい頬ひげがあり、江南（南唐）の韓熙載そのままだ。熙載も諡を文靖とするから愈と同じで、且つ韓文公と呼んでいるので間違つて愈のこととしてしまったせいである。愈は太つていて髻^{はあむけ}もなかったが、後世では区別できなくなっていた。

出典は『夢溪筆談』（巻四・弁証・77）。

197 保憲曆道

賀茂保憲の先祖は彦命尊で、後胤が吉備真備。彼が靈龜二年に中国に渡り五經・三史・陰陽の諸芸を日本に伝え、右大臣に至った。孝謙帝世に一族は賀茂の姓を賜り、その七世の後胤保憲は曆を造った。天文・曆数を掌る陰陽寮は賀茂氏が担当していたが、保憲は曆道を子の光榮に伝え、天文道は弟子の安倍晴明に伝えた。

出典は『本朝神社考』（下之六・泰親）であろう。『本朝蒙求』（巻中・127賀安天文）も近い。この故事に関連する説話は『続古事談』（第五・諸道・13話）『帝王編年記』（永延元年条）など諸書に見え、『本朝語園』（巻七・338天文道曆道）に受継がれている。『扶桑蒙求』（巻下・87保憲曆道）は本書に依る。

198 京房易占

京房の字は君明、『易』を学び災害や変異を当てるのに優れていた。六〇〇卦を分け一年の日数にあて、風雪寒温を占った。

出典は未詳。但し、『漢書』(巻七五・陸賈夏侯京翼李伝第四五・京房伝)『蒙求』(313「京房推律」)『十八史略』(巻二・西漢・孝元皇帝)を混成したようにも思える。

199 実時墨印

金沢(北条) 実時は書籍に耽り、金沢文庫を営んで万巻の書を納めた。金沢文庫の四字を印に刻み、仏書には朱印、儒書には墨印を押した。実時の後裔貞顕は清原敦隆に『群書治要』を講じさせ、今の世に行われているのはその遺本である。

出典は『日本古今人物史』(巻二・名家伝・4金沢実時伝)。墨印・朱印のことは他に『林羅山文集』(巻六一・本朝地理志略)『鷲峰文集』(巻七九・西風涙露下)『本朝蒙求』(巻上・47金庫二印)『本朝語園』(巻五・書籍・229金沢文庫)『鎌倉大草紙』所引)『見聞談叢』(巻四・367金沢文庫)など諸書に見え、『扶桑蒙求』(巻中・23実時黒印)は本書に依る。

200 鄴侯紅籤

鄴侯の李泌は書を多く有し、經書には紅牙の籤、史書には緑牙の籤、子書には青牙の籤、集書には白牙の籤を用いた。

出典は『古文真宝前集諺解大成』(五言古風長篇)に見える韓退之「送下葛寛往三随州」讀之書」(鄴侯家多書、架插三万軸、一一懸二牙籤、新若二手未触」詩句)の「懸牙籤」の注。

〈付記〉本稿は二〇一一年度個人研究助成(課題「桑華蒙求の研究」)による成果の一部である。

